

続々・朝光寺原式土器の根源的研究 —横浜市青葉区大場町稻荷前弥生集落址について—

坂本 彰・宮田 毅

目 次

はじめに

1. 稲荷前古墳群の調査
2. 弥生時代後期の遺構
3. 弥生時代後期の遺物
 - (1) 東京湾岸系土器
 - (2) 朝光寺原式系土器
 - (3) 土器の様相－まとめにかえて－
 - (4) 土製品・石製品・青銅製品
4. 稲荷前弥生集落の意義

おわりに

附－朝光寺原遺跡C地区南西部全景（写真）

はじめに

筆者らは2021年から、朝光寺原式土器研究の一環として、朝光寺原・三殿台遺跡の資料調査・検討を行い、次のような結果を得た（坂本・宮田2022a）。

1. 朝光寺原式土器の基準資料である朝光寺原遺跡B区510号住居址出土土器の全容を明るみに出し、北関東北西地域（沼田地域）の後期土器と深い関わりがあることを指摘した。
2. 従来、朝光寺原式土器の存在が明確ではなかった三殿台遺跡弥生後期集落の内、約4分の1の住居址に朝光寺原式土器が存在することを明らかにし、朝光寺原式土器分布圏のあり方に一石を投じた。

時あたかも、小文に接した南武藏弥生集落址研究のパイオニア・田中義昭氏から、「研究に役立ててほしい」と、稻荷前弥生集落址の青焼き原図（S=1/100）が送付されてきた。同集落址は、朝光寺原遺跡の上流（朝光寺原遺跡の北北西約1.6km）に位置する稻荷前古墳群の1・13号古墳の墳丘下から検出されたものであるが（甘粕1968・69）、これまで、概要が知られたのみで（坂本1986）、報告書は未刊である。住居址プランが隅丸長方形で、主柱穴外地床炉といったあり方から、朝光寺原期の集落址と考えてきた。同時期の遺跡が密集する赤田遺跡群とも隣接しており（渡辺1994・98）、朝光寺原遺跡B区とも比較検討するには格好の遺跡であろうと思われた。

稻荷前古墳群の遺物・関係資料は、現在横浜市歴史博物館に収蔵されている。そこで調査にとりかかったところ、遺物の大半は存在するものの、原図・写真・日誌などの記録類は全く残されていなかった。やむ



写真1 稲荷前古墳群全景（中央手前：1号墳、同奥：2号墳、手前右：13号墳、同左：C群横穴墓 —森 昭氏撮影、甘粕 2004『えびの歴史 海老名市史研究 第14号』原図—）



写真2 稲荷前1・13号墳完掘全景（前方部が低平な1号墳と、同手前の13号墳の下に集落址がある —森 昭氏撮影：新潟市文化財センター所蔵の甘粕 健資料—）

をえず、報告作成のために記録類を所持していたと考えられる調査団長であった甘粕 健氏（2012年逝去）が赴任した新潟大学と、氏の資料が保管されている新潟市文化財センターを調査したが、集落址関係は全景写真4枚を確認したのみであった（写真2・3）。

横浜市歴史博物館が収蔵している弥生集落の遺物はテン箱10個ほどで、土器は接合・復元が行われ実測図が作成されていた。原図作成者の澤田大多郎氏（武藏地方史研究会）にうかがうと、整理は1970年代に港北ニュータウン埋蔵文化財調査団事務所（当時は港北区中川町）において、山口隆夫氏と共に行ったという。作図された土器の大半は現存していたが、土製勾玉・鐸形土製品・青銅製鏡などは見あたらなかった。以上のことから、澤田氏の了解を得て、実測図を活用させていただいた。

土器を精査したところ、朝光寺原式土器は極めて少なく、主体は東京湾岸系土器（久ヶ原式・弥生町式）であることが判明した。明確な櫛描文は2点のみで、朝光寺原式系土器はほとんど無文であり、荏田遺跡群の釈迦堂遺跡（渡辺1989・2003）に様相が類似していた。

続いて2024年には、近接する大場富士塚遺跡の弥生土器を検討した（坂本・宮田2024）。

このように、小文は未報告の稻荷前弥生時代集落址の内容を明らかにすると共に、いわゆる朝光寺原式土器分布圏における土器・集落のあり方を再検討することを目的としている。

小文は、はじめに・1～3・3-(4)・4・おわりに、を坂本が、3-(1)～(3)を宮田が分担執筆した。また、写真撮影・実測・採拓は宮田並び宮田裕紀枝が行い、デジタル・トレースは宮田（裕）が、図版作成は宮田が担当した。

資料調査日程は、次のとおりである（すべて2022年）。

- a. 横浜市歴史博物館 （7月17日、8月2日、10月13日）調査者：坂本・宮田・宮田（裕）
- b. 新潟市文化財センター （8月22日）調査者：坂本・宮田
- c. 新潟大学旭町学術資料館 （11月17日）調査者：坂本

1. 稲荷前古墳群の調査（第1～3図、写真1・2）

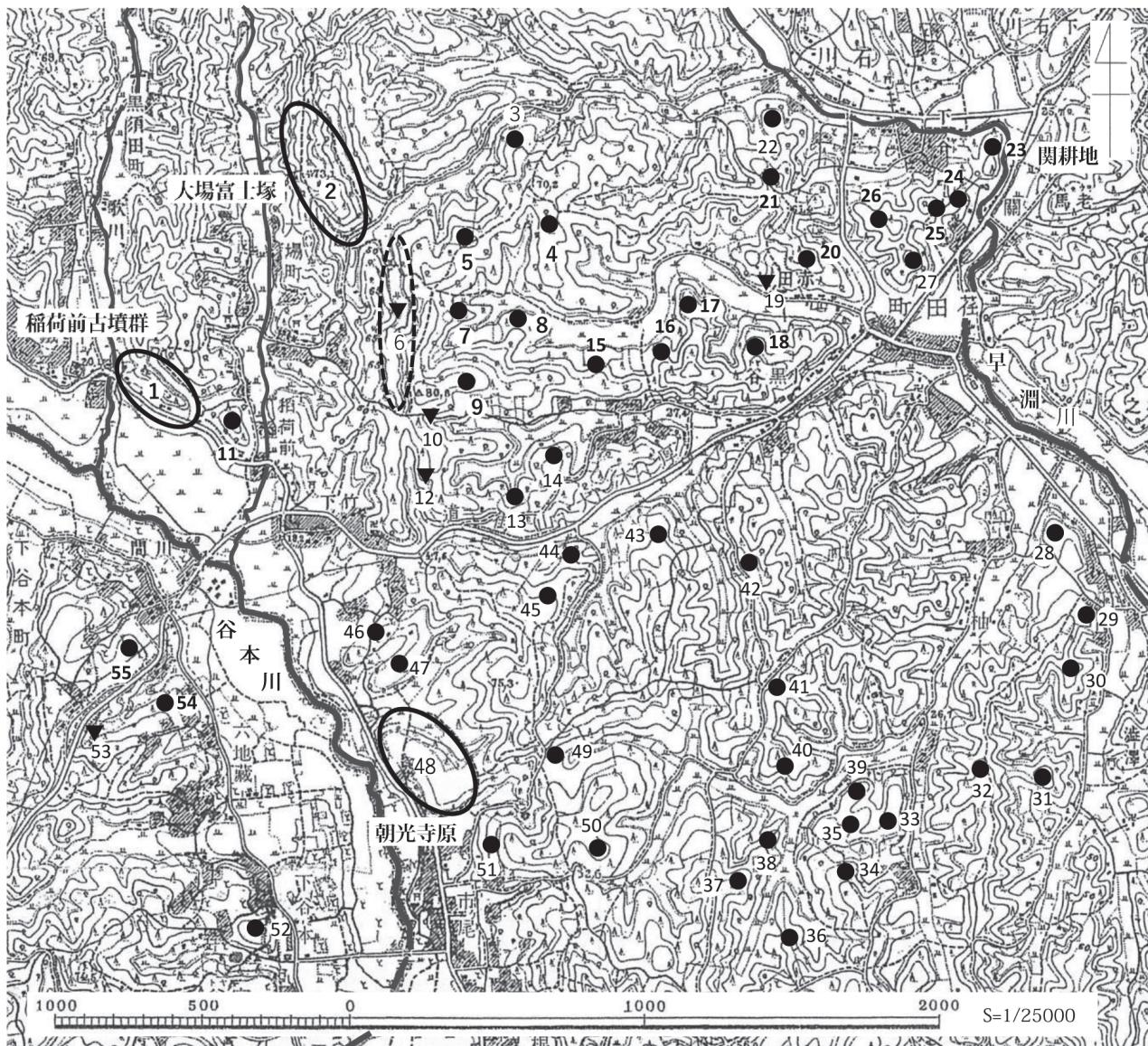
稲荷前古墳群は横浜市青葉区大場町にあり、鶴見川上流の谷本川北岸（左岸）に位置している。付近は標高60～70mの多摩丘陵支丘にあたり、西を黒須田川、東を大場川に挟まれ、北から南へ伸びる狭長な支丘の先端に立地し、谷本川の沖積地を望むことができる。本遺跡の東方には、大場富士塚遺跡・赤田遺跡群・小黒谷遺跡（I・II）・長者原遺跡・朝光寺原遺跡など、朝光寺原式土器を出土する遺跡が多数展開している（第1図）。

10基の古墳は、黒須田川下流東岸の小支谷を囲むように分布しており、1967年6月に発見された。北端に6号墳、同古墳の東側崖下にB1～3号横穴墓、東方にA1号横穴墓がある。小支谷南側に5・3号墳が、南尾根上には北から2・1・13・14・15・16・17号墳がほぼ一列に並び、1号墳西側の崖下にはC1～3号横穴墓が存在する（第2図）。

A. 第1次調査（1967年8月5日～9月10日）

1・2号墳は測量のみで、1号墳は畿内型式の前方後円墳、2号墳は円墳と判明した。調査した3・5号墳は後期の円墳、6号墳は本地域における初源期の前方後円墳と考えられた。A1・B1～3号横穴墓が調査された。

弥生後期の遺構は5号墳南側で1号並列溝、6号墳丘で土器片、12地点で1号住居址が検出された（甘粕



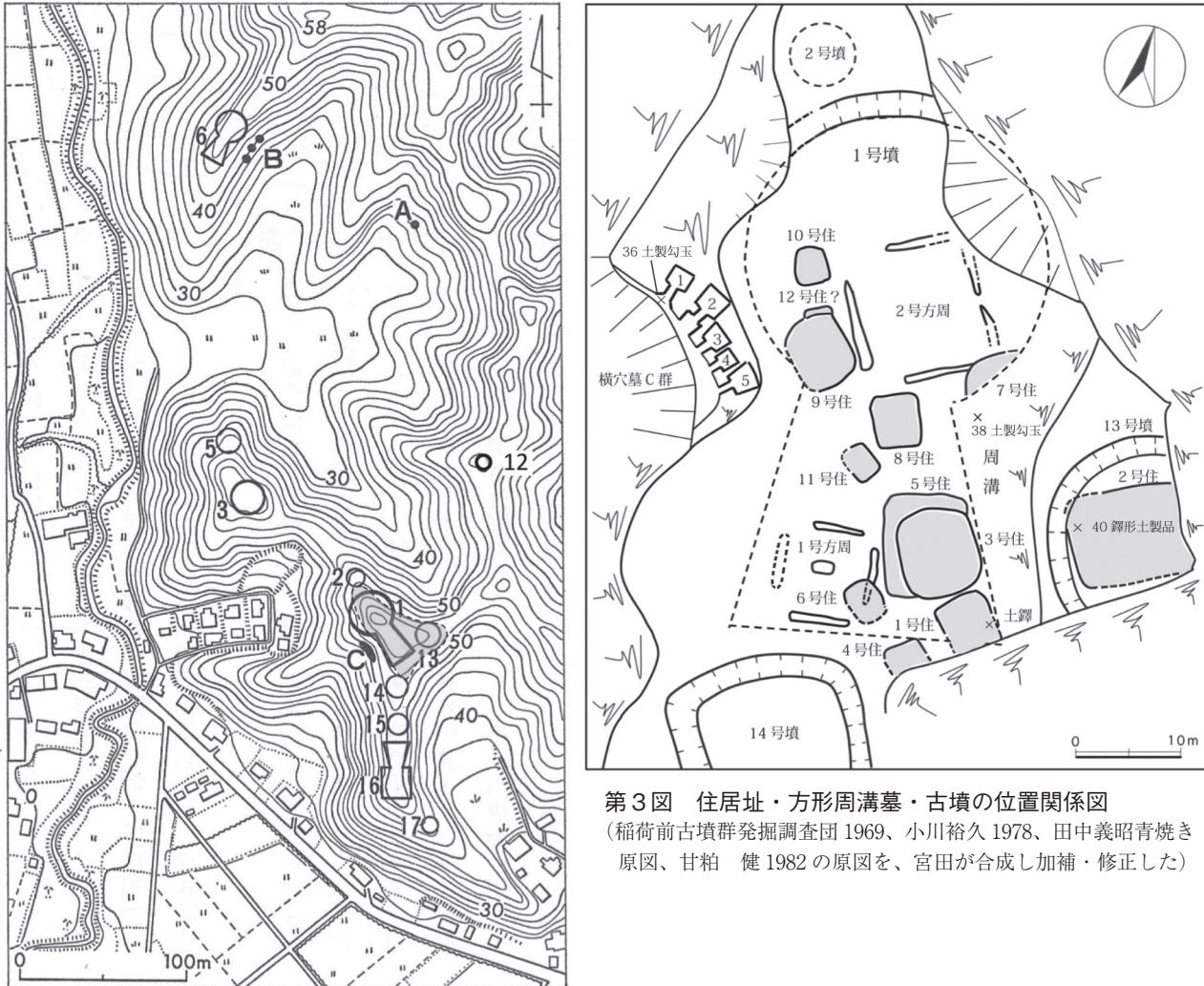
- | | | | | | |
|------------|------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 稲荷前(遺跡) | 2. 大場富士塚 | 3. あざみ野 | 4. 赤田11 | 5. 赤田14 | 6. 大場横穴墓群 |
| 7. 赤田15 | 8. 赤田12 | 9. 小黒谷・赤田17 | 10. 小黒谷横穴墓群 | 11. 寺下 | 12. 市ヶ尾横穴墓群 |
| 13. 小黒谷IV | 14. 小黒谷V | 15. 赤田10 | 16. 赤田2 | 17. 赤田1 | 18. 赤田3 |
| 19. 赤田横穴墓群 | 20. 赤田7・8 | 21. 赤田6 | 22. 道明台 | 23. 関耕地 | 24. 觳福寺北 |
| 25. 觳福寺裏 | 26. 釈迦堂 | 27. 虚空藏山古墳 | 28. 矢崎山西 | 29. 矢崎山 | 30. 矢崎山古墳 |
| 31. 莢田45 | 32. 莢田44 | 33. 華藏台 | 34. 莢田2 | 35. 莢田25 | 36. 莢田9 |
| 37. 莢田17 | 38. 莢田59 | 39. 莢田1 | 40. 莢田19 | 41. 莢田21 | 42. 拝堂 |
| 43. 長者原 | 44. 長谷 | 45. 中野原 | 46. 鹿ヶ谷 | 47. 寺中ノ原 | 48. 朝光寺原 |
| 49. 細谷台 | 50. 亀ノ子台 | 51. 中里 | 52. 馬場台 | 53. 上谷本横穴墓群 | |
| 54. 上谷本IIA | 55. 上谷本IIB | | | | |

第1図 稲荷前遺跡と周辺遺跡位置図（下図は1947年：荏田）

ほか1968)。

B. 第2次調査（1969年2月10日～1970年6月17日）

1号墳は5世紀の前方後円墳、2号墳は不明、13号墳は7世紀の円墳、14・15号墳は後期の方墳と判明した。16号墳は墳形から後期の前方後方墳、17号墳は円墳と確認された。さらに、C1～5号横穴墓の調査が行われた。また、研究者・市民による保存運動が展開されたが、全域の保存とはならず、1号墳以北は削



※ 1～3・5・6・13～17 地点は古墳、12 地点は住居址、A～C は横穴墓、弥生後期の集落址は 1・13 号墳の下にあり、6 号墳からも弥生後期の土器が出土す。

第 2 図 稲荷前古墳群分布図（小川 1978 に加筆修正、原図は甘粕 健による）

平となった。

本遺跡における弥生後期の集落址は、1・13 号墳の撤去後に約 1 カ月の調査が行われ、1～11（12）号住居址と 1・2 号方形周溝墓が検出された（稻荷前古墳群調査委員会 1969）。

以上は調査終了後に煙滅し、15～17 号墳は 1970 年 3 月 24 日に神奈川県史跡に指定された（小川 1978、横浜市教育委員会 1979）。

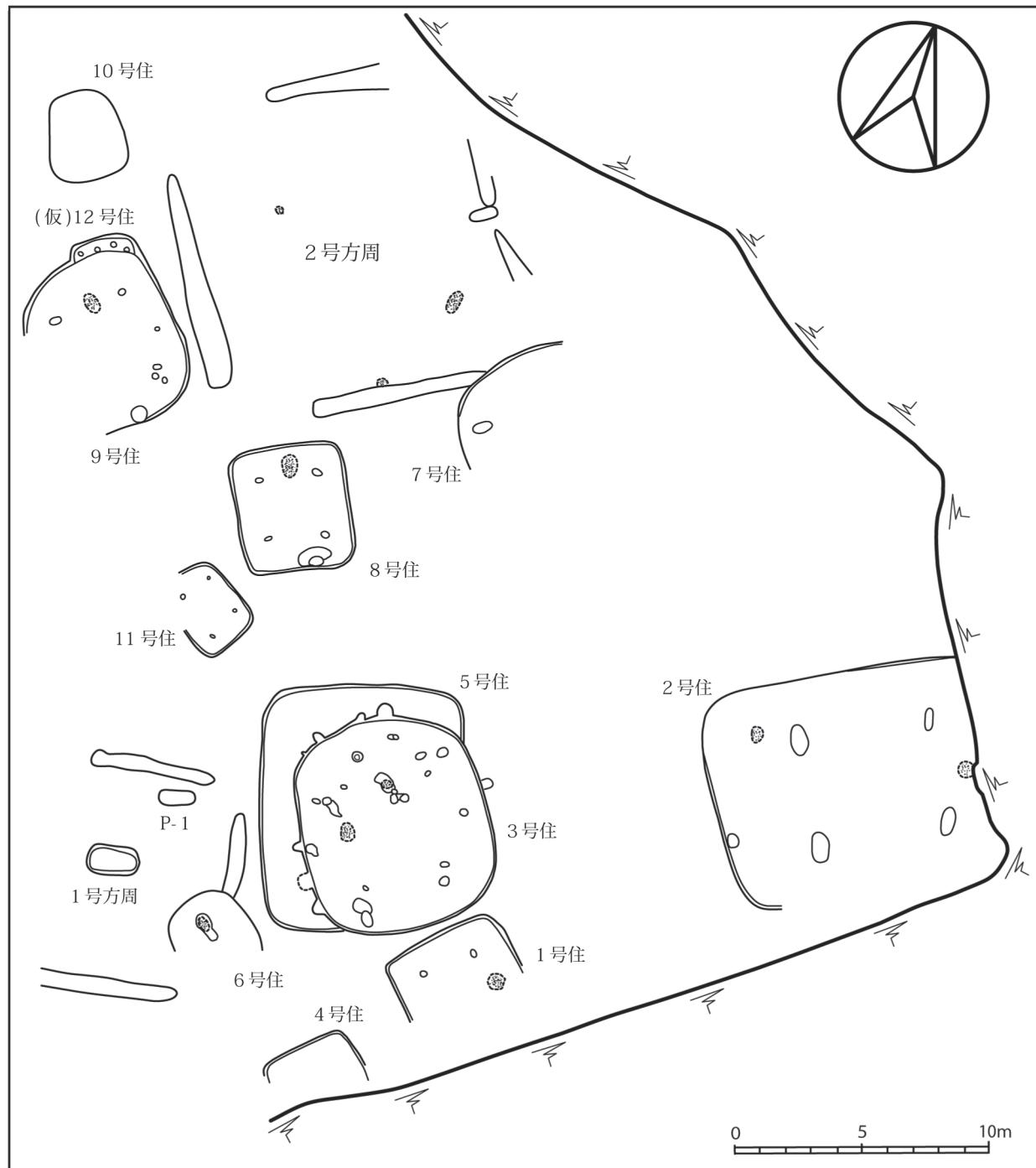
C. 第 3 次調査（1981 年 4 月 29 日～5 月 10 日、1982 年 3 月 16 日～6 月 10 日）

史跡の保存整備に伴い、16 号墳の墳形確認調査が行われた。第 2 次調査時に後期の前方後方墳とされていたが、周溝内から埴輪壺が出土したことにより、4 世紀の前方後方墳であることが確認された。17 号墳からも土器片が採集された（甘粕・山口 1982）。

古墳群の調査は、甘粕 健氏（後に新潟大学教授）が担当し、武藏地方史研究会員、在京及び新潟大学考古学専攻生などが協力した。写真撮影は、カメラマン・森 昭氏が行った。ただし、弥生後期集落址の調査に係わった調査協力者については、現時点では把握できていない。

出土遺物の整理は、甘粕氏の下で山口隆夫氏を中心に、澤田大多郎氏らが行ったが、報告書は未刊である。山口氏は、3次調査時に港北ニュータウン埋蔵文化財調査団員であったが、1990年代半ば以降は連絡不能となり現在に至っている。

なお、16号墳出土の埴輪壺については、最近になってようやく報告されたので併せて参照されたい（古屋 2024）。



第4図 稲荷前遺跡弥生後期集落址全測図 (S=1/300、田中義昭氏提供青焼き原図を再トレースし加筆)

2. 弥生時代後期の遺構（第4図、写真3）



台地の東側から南側にわたり斜面が大規模に削平され、かろうじて残った台地上の1号墳・13号墳墳丘下に、住居址12軒と方形周溝墓2基が確認されている。上方の十字トレンチは2号墳。中央左端の木の葉状の平坦地はC群横穴墓の前庭部。中央よりやや右上の井桁状木組みは写真撮影用の櫓。—上がほぼ北方向—

写真3 稲荷前遺跡弥生後期集落址全景（森昭撮影：新潟市文化財センター所蔵 甘粕健資料）

稻荷前古墳群では、遺構3ヵ所、遺物出土1ヵ所が知られている（甘粕ほか1968）。4ヵ所の内3ヵ所は古墳と重複しているので、弥生後期と区別するために、適切な名称を付した。

a. 稲荷前集落址

(第3・4図、写真3)

集落址は、古墳群の南部に位置する1・13号墳の下部に存在した。谷本川沖積地を見下ろす一辺40mの略三角形状の平坦面に、遺構が分布している。遺構の大半は西側高位部に集中し、東側の低位部は住居址

1軒のみである。1号墳の周溝掘削によって消失した可能性もあるが、集落の全容はほぼ残していると考えられる。住居址11軒(12軒)・方形周溝墓2基の内、重複は住居址が2ヵ所、住居址と方形周溝墓が2ヵ所である。以下のデータは、遺構全測図に依拠して作成したもので、各住居址の細部については明確にしえない。

住居址の内、大型住居址は2・3・5号住居址の3軒で、3号と5号は重複し、5号→3号と推定される。主軸(長軸)方向は、南側の1・2号が東西で、ほかの大半は南北である。6・7号は1・2号方形周溝墓と重複している。以上のことから、少なくとも3段階の時期が想定される。

b. 1号並列溝(第5図左)

第4号地点あり、小支谷に北面した5号墳南側に位置する。南方が3号墳である。両古墳中間の凹地両側を区画するように、南北2条の直線的な溝が尾根と直交して直線的に伸びている。南溝は長さ4.7m、幅2.7mで、大きな土壙状を呈する。北溝は5号墳南溝に切られ、長さ6m以上、幅1.7mある。両溝の間隔は3.5mで、その中間は遺構未検出である。溝内から「樽式土器の破片が出土」と記録されているが、溝内は未調査のため、時期の確認は困難である。また出土遺物も、収蔵品の中には見当たらなかった。

c. 12号地点1号住居址(第5図右、第8図31・33、写真8-20・写真9-22)

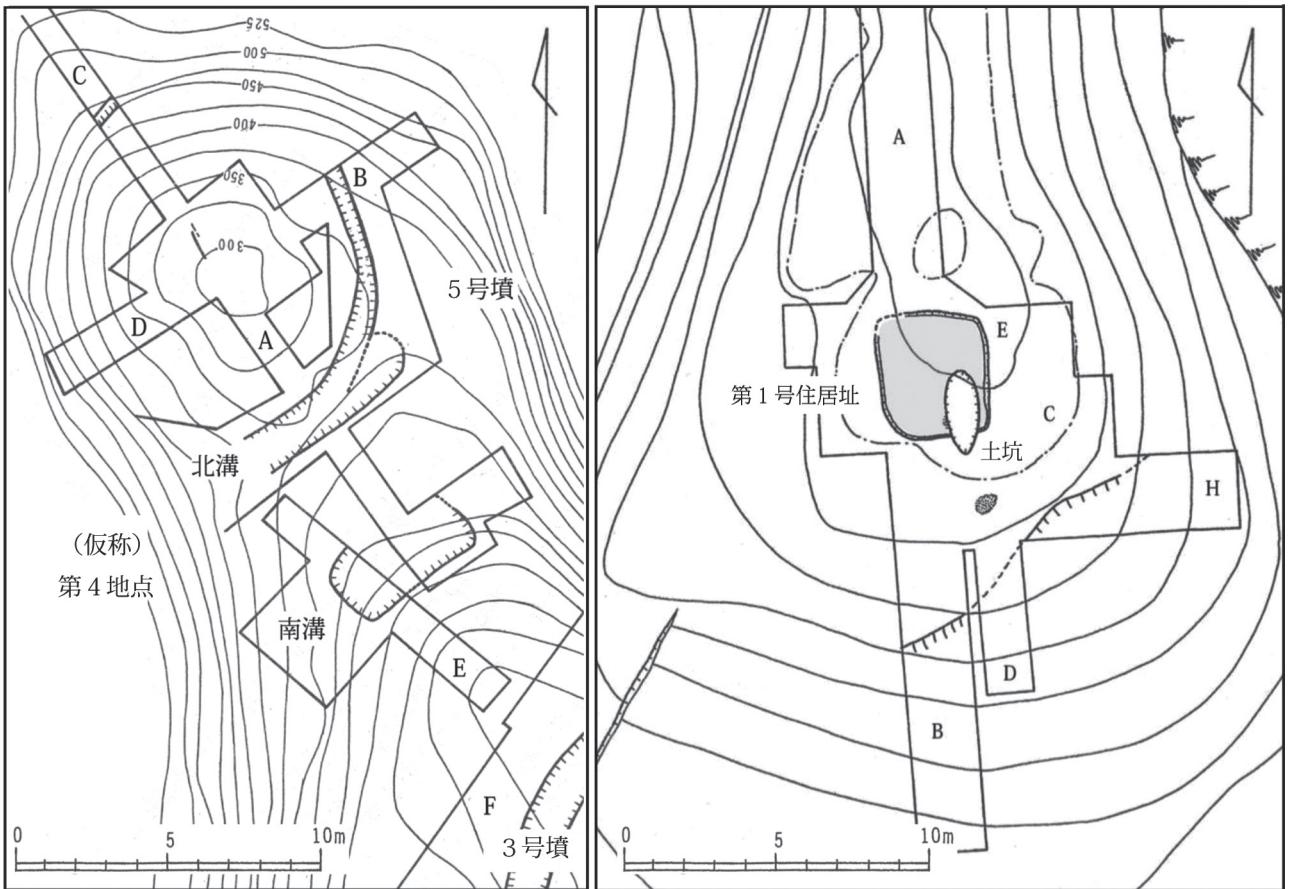
本住居址は、集落址の東北方約100m、小支谷南部東方の南北尾根頂部に単独立地する。一辺7~8mの狭い平坦面に、住居址1軒のみが存在した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は東西3.3m、南北3.7m、深さ40cmである。床面に薄い焼土が有り、朝光寺原式土器が出土した(第8図33、写真9)。住居址の南東部に舟形土壙(長2.45m×短1.1m×深さ0.5m)が掘り込まれ、中から朝光寺原式土器(第8図33、写真8)が出土した。他に弥生町式土器片も出土している。

第1表 稲荷前遺跡住居址一覧表

住居址No.	平面形	規模(m)	主柱穴・ピット	地床炉の位置	重複関係
1号住居址	隅丸方形	4.9×2.8	主柱穴2	主柱穴間外	
2号住居址	隅丸長方形	10.5×6.8	主柱穴4、出入口(柱穴)	主柱穴間外	13号墳周溝
3号住居址	楕円形	8.5×2.4	主柱穴4	主柱穴間外	5号住居址
4号住居址	隅丸方形	7.5×3.6	—	—	
5号住居址	隅丸長方形	9.7×7.9	—	—	3号住居址
6号住居址	隅丸方形	3.1×3.1	—	—	1号方形周溝墓
7号住居址	小判形?	5.5×3.0	—	—	2号方形周溝墓
8号住居址	隅丸長方形	5.0×4.5	主柱穴4、貯蔵穴	主柱穴間外	
9号住居址	隅丸長方形	6.8×5.6	主柱穴3、出入口(柱穴)	主柱穴間	12号住居址
10号住居址	不整長方形	3.6×3.0	—	—	
11号住居址	隅丸長方形	3.5×2.6	主柱穴4	—	
12号住居址	隅丸長方形?	?×2.7	—	—	9号住居址

第2表 稲荷前遺跡方形周溝墓一覧表

方形周溝墓No	溝数	規模(m)	主体部	土壙	重複関係
1号方形周溝墓	3条	9.5×7.2	1	1	6号住居址
2号方形周溝墓	4条(南欠)	13.0×13.4	—	1	7号住居址



第5図 稲荷前遺跡（仮称）第4地点 1号並列溝（左）・第12地点第1号住居址（右）
(甘粕ほか 1968 の原図に加筆・修正)

d. 6号墳丘封土の遺物（第7図25、写真7-19）

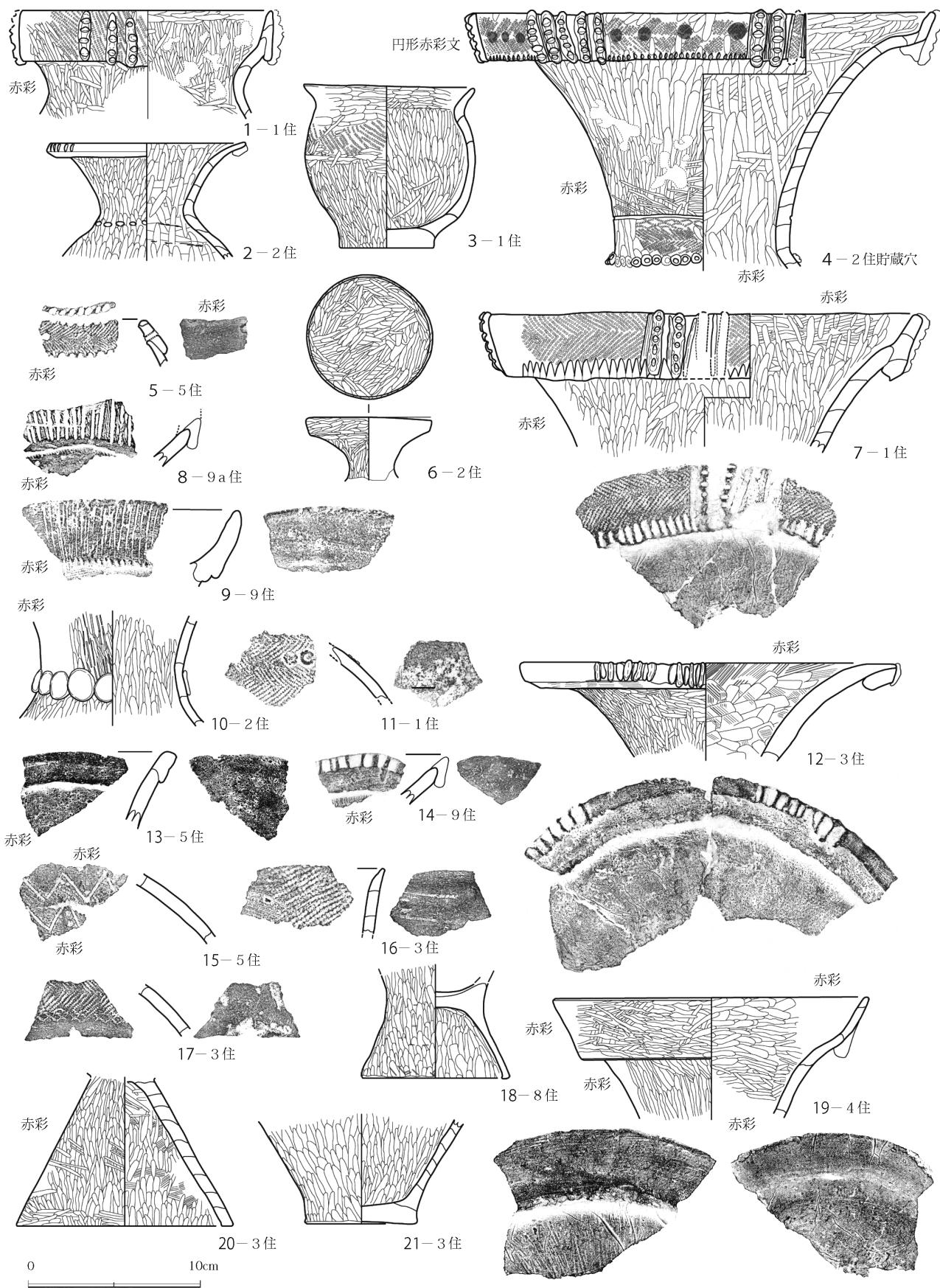
6号墳は古墳群の北端、黒須田川に西面して東側を小支谷北部に挟まれた細長い尾根上に立地している。前方部西側の4（西）トレンチ2層から朝光寺原式系土器（第7図25）が出土している。比較的大形破片であるため、後円部付近に住居址の存在が推定されるが、調査時は未検出であった。

3. 弥生時代後期の遺物（第6～9図、写真4～9、第3表）

(1) 東京湾岸系土器（第6～8図、写真4～9、第3表）

図示した資料は、横浜市歴史博物館で実見した資料の一部にすぎない。澤田大多郎氏は、弥生時代の土器94点（破片断面図多数）の実測図を残していたが、この内掲載できたのは17点（18%）である。多くが断面実測であるため、遺物と実測図を突合させることが難しかったためである。新たに土器16点を実測（再実測を含む）、拓影を添付して33点を図示した。

稻荷前集落址の出土土器は、資料調査前の予想とは異なり、弥生後期東京湾岸系土器を主体としていた。住居址出土の朝光寺原式土器は10号住の1点のみであった。他に本集落址北北東100mの痩せ尾根頂部で確認された第12号地点第1号住居址から2点出土しており、これらを併せて図示した（第6～8図）。なお、久ヶ原式系土器の編年観については、古屋紀之氏のご教示並び安藤広道氏案に従い（安藤2017・19）、朝光寺原式系土器については、渡辺 努氏の赤田編年案に従った（渡辺1994・98）。



第6図 稲荷前遺跡出土東京湾岸系土器実測図① (1~21)

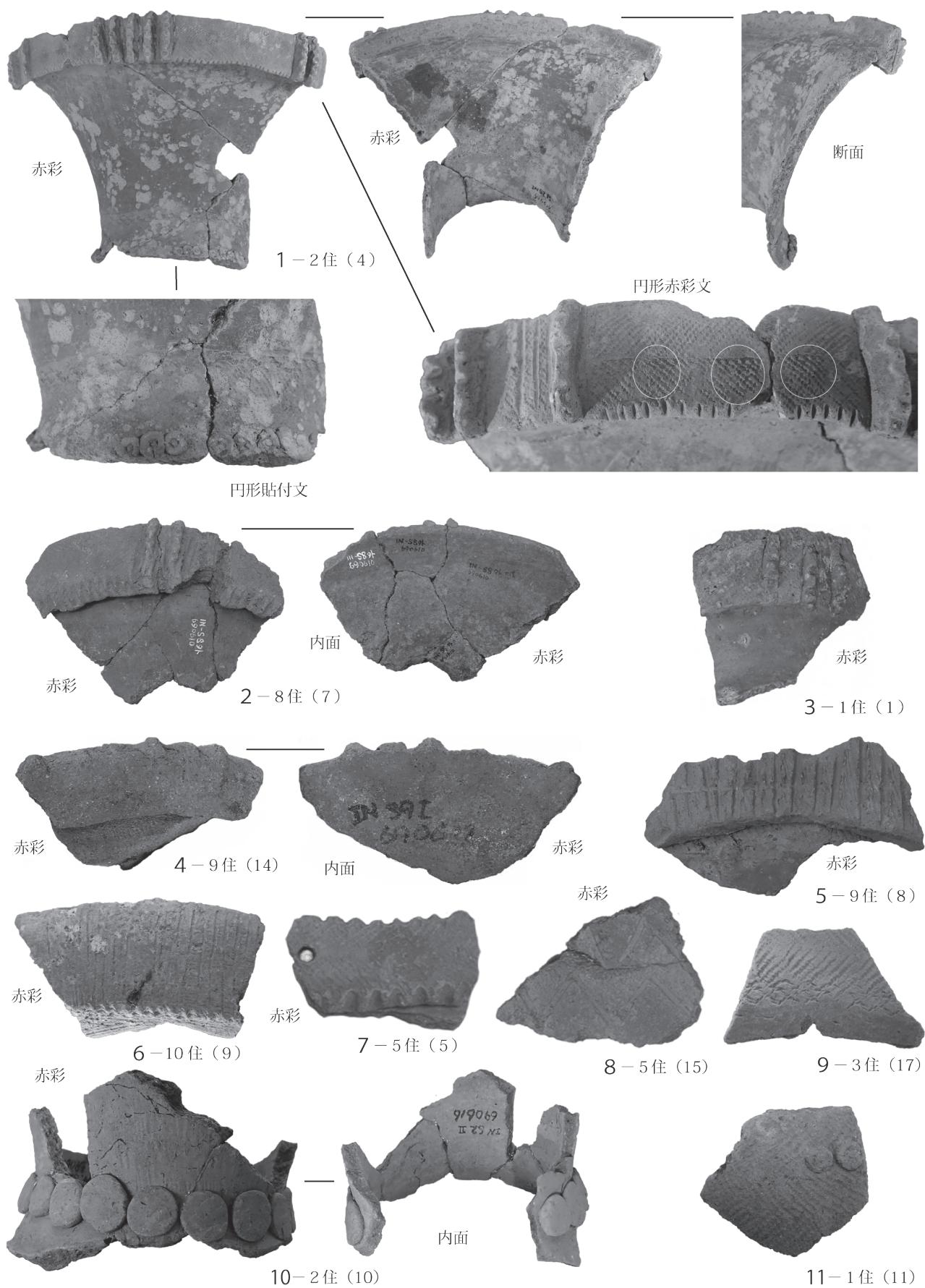
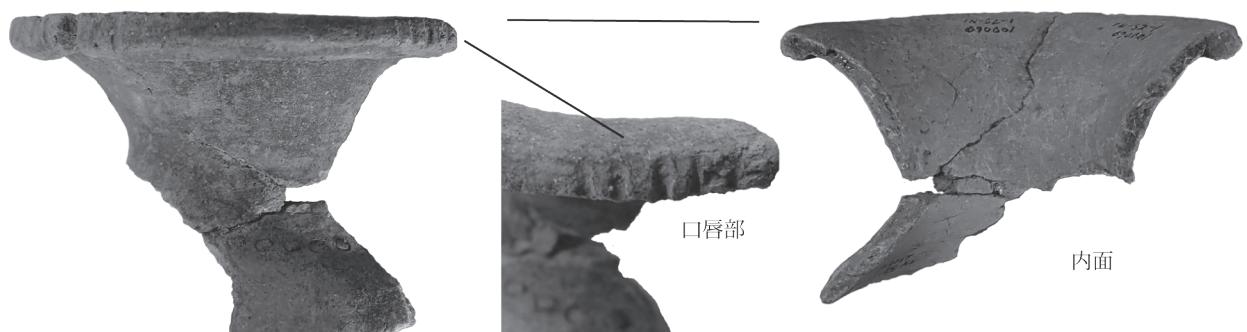


写真4 第1～3・5・8～10号住居址出土土器 (1～11)



12-3号住 (12)

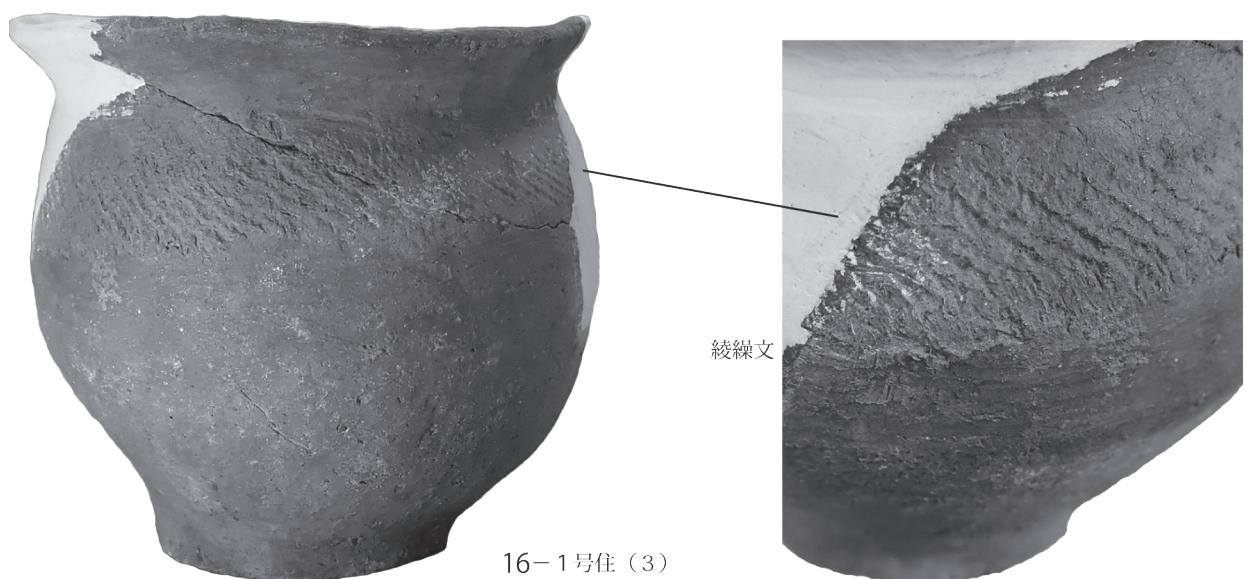


13-2号住 (2)



14-4号住 (19)

15-5住 (13)



16-1号住 (3)

写真5 第1～5号住居址出土土器 (12～16)

稻荷前遺跡における久ヶ原式壺形土器の口縁部形態については、松本 完氏の先行研究がある（松本 1984）が、これを参考にしつつ、断面形状をここでは大別して二つの形態を捉えておく。

- I. 僅かに外湾しながら概して大きく開く口縁で、最上段の輪積粘土を幅 2.5 ~ 3.5cm ほどの板状として垂直的に貼り付け、下端は器面より突出（垂下）させるもの。したがって外面は段を有する。内面は、その接合部で内屈して立ち上がり受口状を呈する。
- II. 折返口縁的な複合口縁で、扁平な粘土紐を貼り付けるか最上段の粘土帯を外側にずらせて貼り付けるもので、その下端に小段を有する。口頸部はラッパ状に大きき開き、扁平な粘土帯は下向きとなるとともに、口唇部は外向き（横向き）となる。

二つの形態は、加飾文様（要素）構成の違いにより、六つの細別分類が可能である。

- a. 羽状縄文または斜行縄文 + 棒状浮文 / b. 羽状縄文または斜行縄文 + 棒状浮文 + 沈線文 /
- c. 沈線文 + 棒状浮文 / d. 沈線文 / e. 条線文 / f. 無文

稻荷前遺跡における実際例でみると、大別と細別の組合せで七つの類型が認められる。

I a 類：斜行縄文施文後に刻目文を有する棒状浮文を縦位貼付している。1号住出土の 1 が該当する。
久ヶ原Ⅲ式の範疇で把えるが、やや新しい段階を示している。

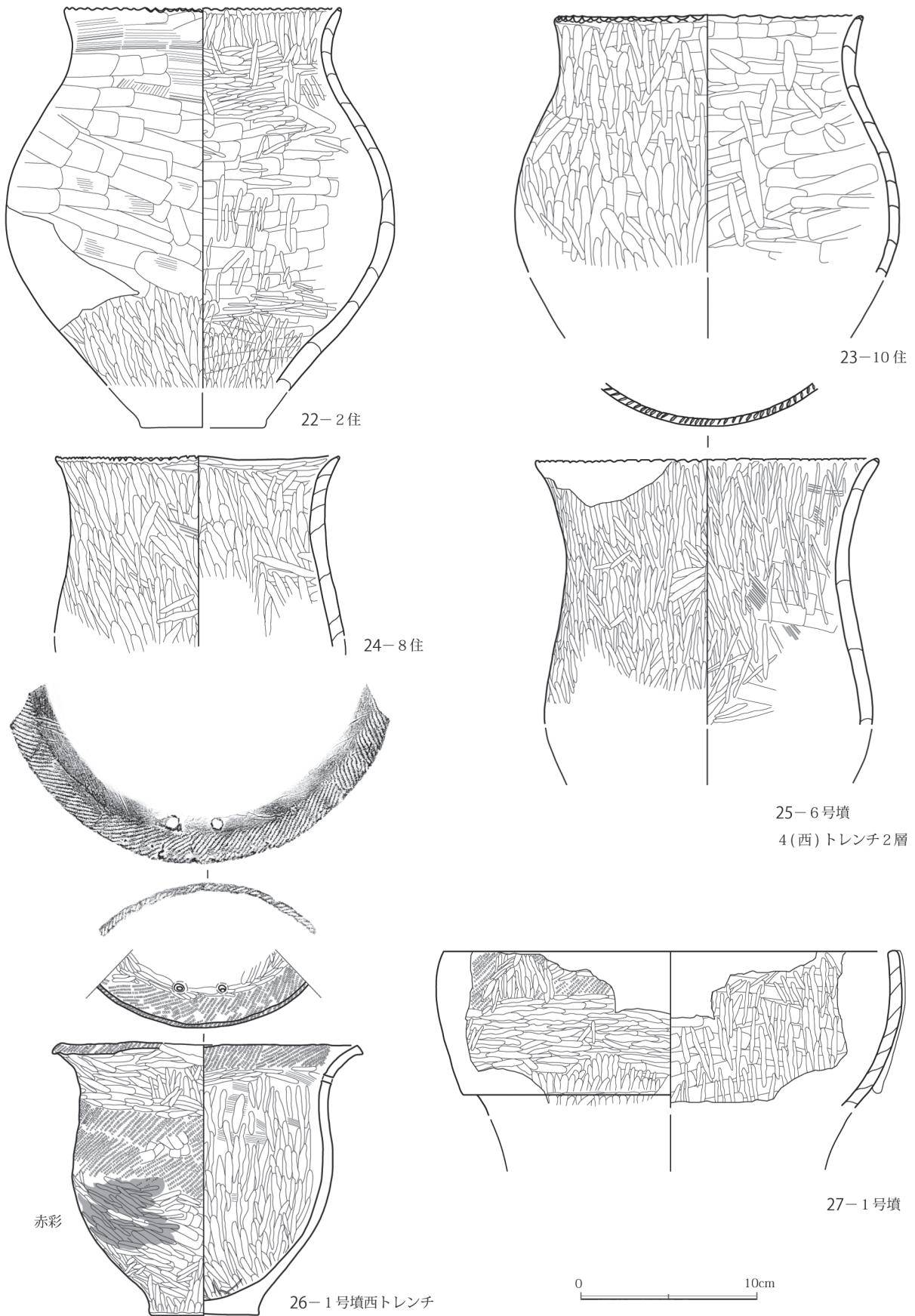
I b 類：羽状縄文を施文後に刻目文を有する棒状浮文を縦位貼付し、その両脇（棒状浮文間）に沈線文を加えている。口縁部文様帶下端には連続刻目文を巡らせている。2号住貯蔵穴出土の 4 と、8号住出土の 7 が該当する。4には、棒状浮文間の羽状縄文部に円形赤彩文を加飾している。また 4 には頸部縄文帶の横帶区画を沈線文と網目状結節文で行っており、頸部屈曲部には竹管文を押捺した小円形浮文 1 列を加飾している。口縁部の加飾が顕著であり、久ヶ原Ⅲ式期に比定できよう。

I c 類：口縁部文様に縦方向の並行沈線文を密に巡らせるもので、9a 号住出土の 8 が該当する。破片であるため棒状浮文を有する可能性がある。とりあえず棒状浮文は無いものとして扱う。沈線文の間に斜行するハケ目調整痕を止めている。9号住出土の 9 は、幅や間隔がやや狭くなり条線化したものである。下端に細かな刻目文を加えている。両者とも頸部無文帶に赤彩があり、久ヶ原式壺形土器の赤彩伝統を継承している。I b 類の口縁部文様帶の簡略化が進んだものとして把えることができる。久ヶ原Ⅲ式期（新）に比定できよう。

I f 類：口縁部文様帶を加飾しないものである。4号住出土の 19 と、1号墳封土出土の 27 が該当する。19 は、頸部外面と内面全体に赤彩が施されている。27 は、縄文を施文した後に棒状ミガキを施し、そのほとんどを磨り消している。縄文施文の痕跡を一部に残す。口縁部文様帶幅が 7cm と広く、断面形状は内湾を示して立ち上がっている。内面の形状は、受口的な屈曲を示さず、スムーズな湾曲線を示して立ち上がっている。19 より後出するものと考えられる。概ね久ヶ原Ⅳ式期（日吉台式期）段階に比定できよう。19 は古墳時代初頭まで下るかも知れない。

II c 類：低く細い縦位棒状浮文と、その脇に浅い沈線を施したものである。棒状浮文には刻目文の加飾はない。12（3号住）と 14（9号住）が該当する。I b 類の系譜を引くものであり、後出すると考えられる。久ヶ原Ⅲ式期（新）の範疇で捉えておきたい。

II d 類：やや幅広の沈線が外向きの口唇部に 7 条ほど並行して縦位に連続施文されている。沈線は下方が深く押圧されており、棒状貼付文を兼ねた施文のように見ることもできる。2（2号住）が該当する。II c 類と近似性が強く、久ヶ原Ⅲ式期（新）の範疇としておきたい。



第7図 稲荷前遺跡出土東京湾岸系土器② (22・23・26・27)・朝光寺原式系土器①実測図 (24・25)

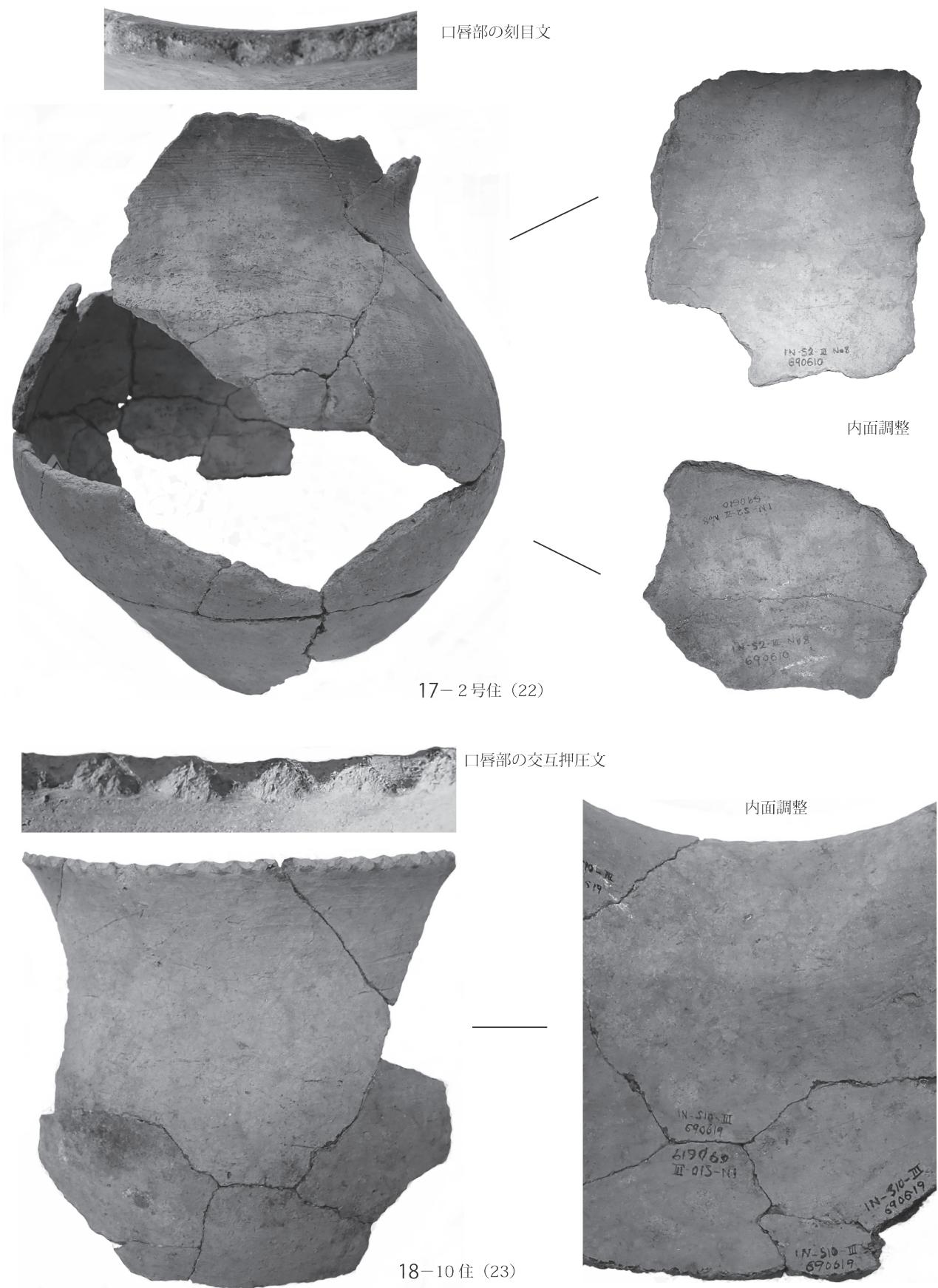


写真6 第2・10号住居址出土土器（17・18）

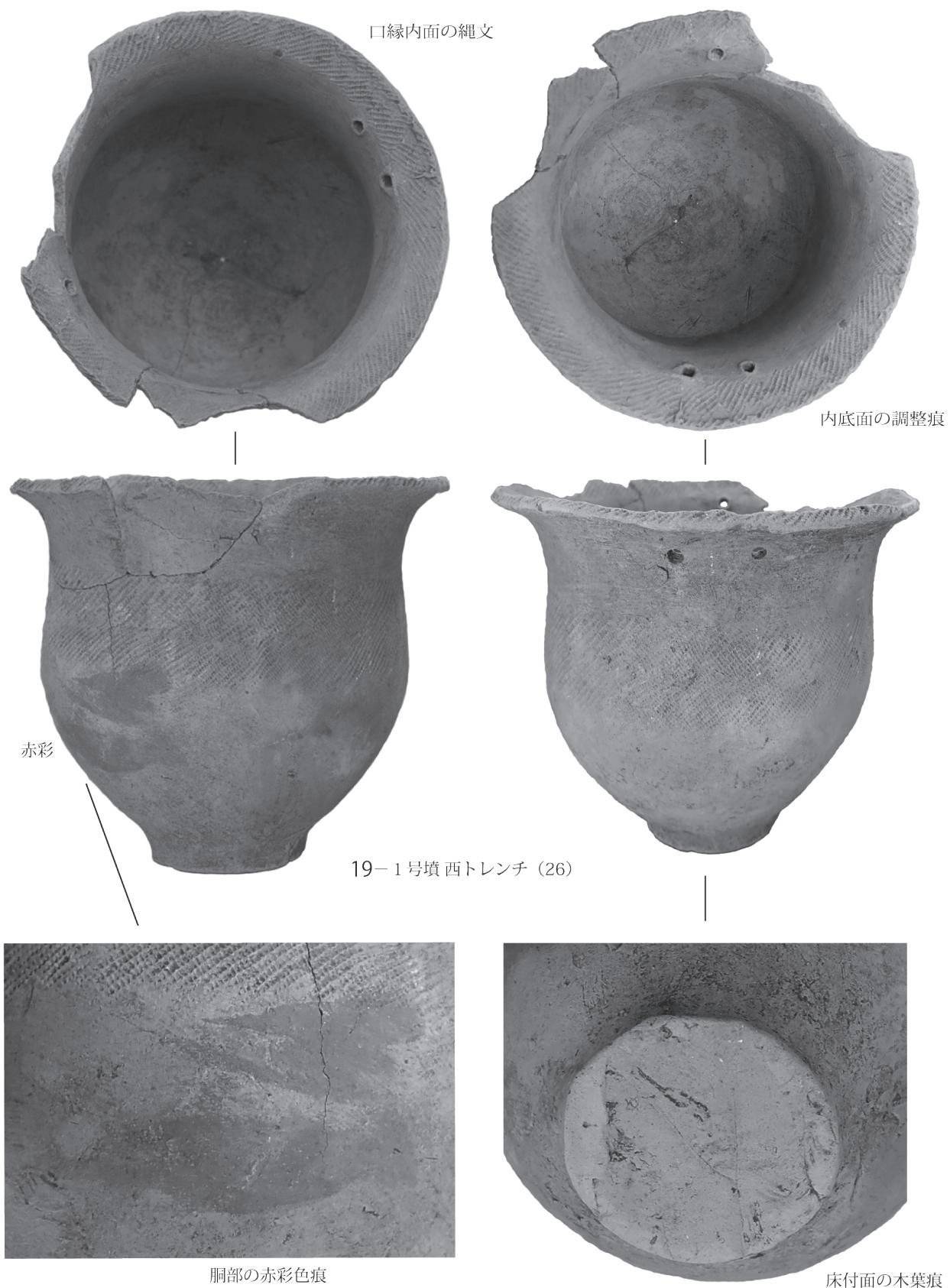
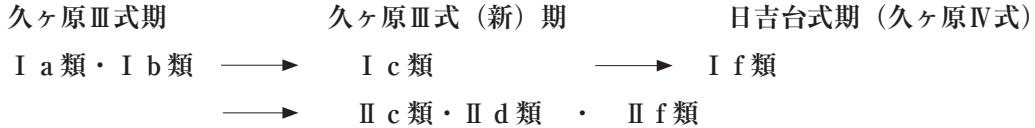


写真7 第1号古墳 西トレンチ出土土器 (19-実測図26)

II f 類：口唇部文様帯が無文となるもので、13（5号住）が該当する。最上段の輪積の接合部を外側にずらせて（はみ出させて）小段を形成している。破片であるため、浮文や沈線を伴う可能性もあるが、無いものとして扱う。**II c 類・II d 類**と類似性を有しており、久ヶ原Ⅲ式期（新）の範疇で捉えられる。

これらの7分類を、安藤の編年案に準拠させると、以下のような変遷をたどることが想定できる。



本遺跡においては、久ヶ原式壺形土器の口縁部装飾が、隆盛するⅢ式期から装飾の衰退（簡略化）が進み、やがて無文化する傾向を看取することができる。このことは、3号住と5号住の切り合いによる新旧関係とも矛盾していない。

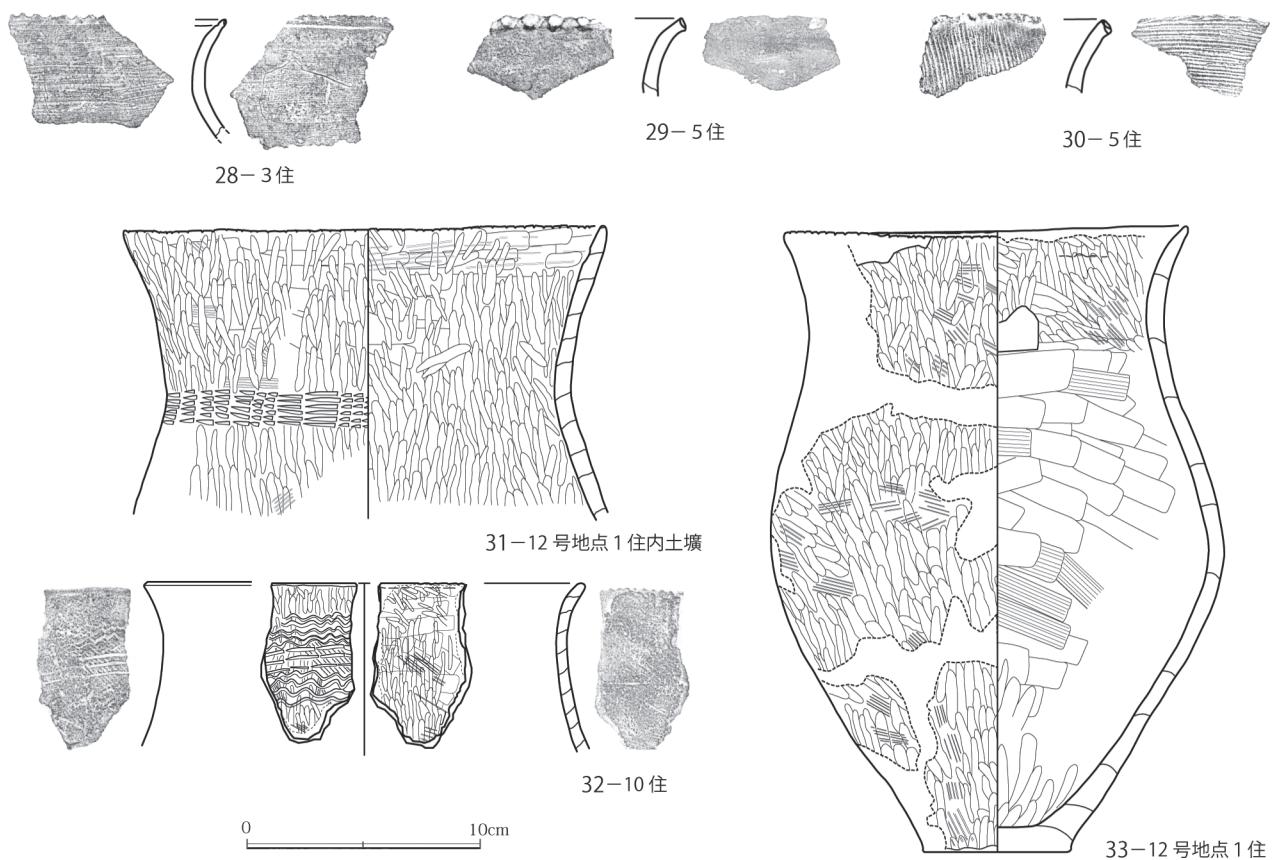
円形浮文は、竹管文を押捺したものが第6図4と11で見られる。多刺突の円形浮文は認められない。10においては、径1.3～1.8cmの扁平な円形浮文を頸部に巡らせている。また、2においては、竹管文のみを押圧して浮文に替えており、簡略化した新しい手法として扱えられる。4においては、口縁部文様帯に円形赤彩文が見られ特記できる。

縄文帯の横帯区画については、3・4・17に見るが、3においては自縄結節文（綾繩文）をミガキで磨り消しており（写真5-16）、区画文への意識の薄れが看取できる。

第7図27は更に顕著であり、口縁部縄文帯のほとんどを棒状ミガキで磨り消している。口縁部文様帯における縄文の存在意義が希薄化しており、無文化傾向の顕れとして扱えられる。1号墳出土であるが、墳丘構築時に住居址覆土中の土器が墳丘盛土に混入したものと思われる。

第7図22・23（写真6-17・18）は、広口の壺形甕であり、胴部は膨んでやや球状を呈する。口頸部は短く、弱い外反を示す。頸部最小径の位置が器体の上位にある。口径は、頸部最小径に比して、22が108%、23が109%と、1%弱広がる程度である。胴部最大径に対しては、22が71%、23が80%を示し、22の口径は小さく短頸壺的である。器形が朝光寺原式に類似する点もあるが、東京湾岸系の影響下にあるものとして扱えておきたい。土器22口唇部の刻目文は、ヘラにより搔き取るように施されている。23の口唇部には交互押圧文が見られる。また、内面には輪積痕を消しきれていない箇所が認められ、器形を含めて吉ヶ谷式の影響も受けていると思われる。

第7図26は、頸部が極僅かに窄まる程度で口縁に至る。口辺部は反り返るように広がる。口唇部は外を向き、斜行縄文（LR）を施文している。焼成前の2孔1対の小孔が、頸部の対称位置に穿たれている。胴部上半には斜行縄文（LR）を一巡させている。この縄文帯の下端には自縄結節文を施し区画文としているが、そのほとんどはミガキの段階で磨り消されている（写真7）。上端部においてもミガキが席捲しており、両者の境界は波状気味となる。下端部の方が顕著である。横帯区画文に対する意識の低下が認められる。また、下半部には指で撫で付けたような赤彩箇所が認められる（写真7左下）。赤彩施文の途中段階であるのか不明である。久ヶ原Ⅲ式（新）に比定できると思われる。



第8図 稲荷前遺跡出土東京湾岸系土器③(28~30)・朝光寺原式系土器②(31~33)

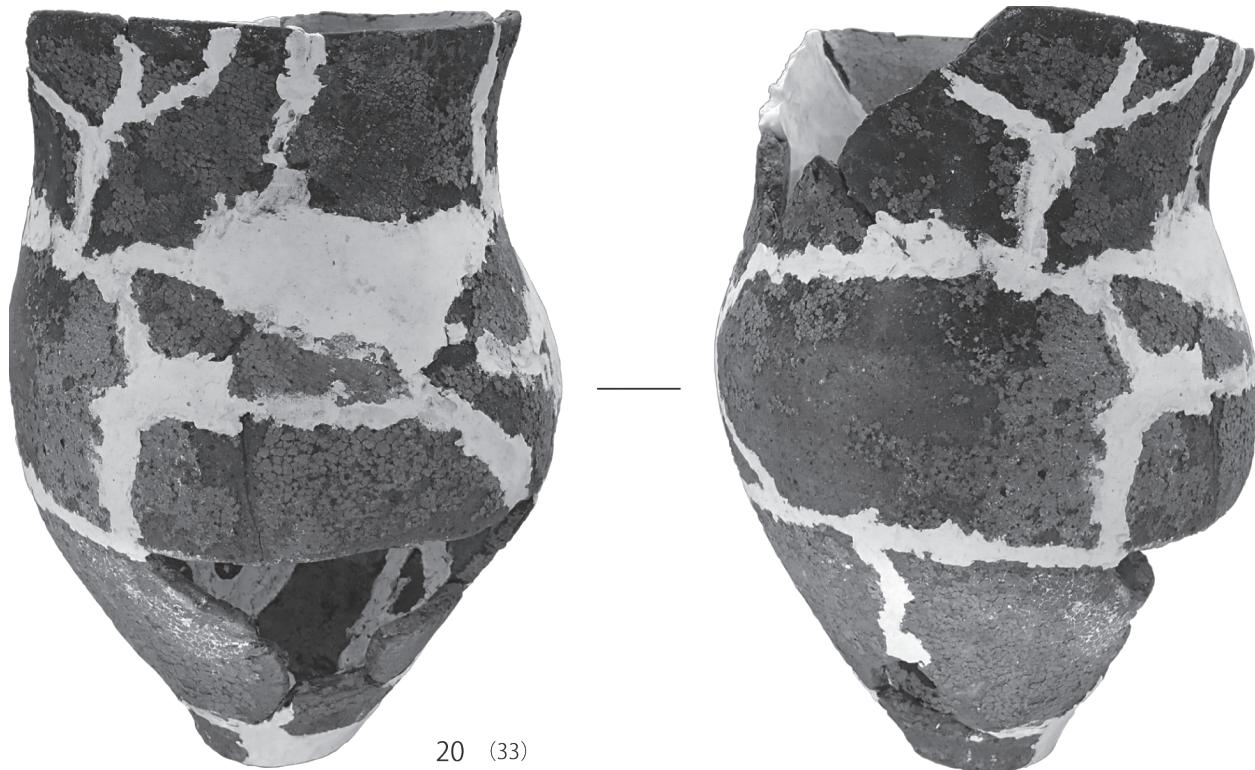


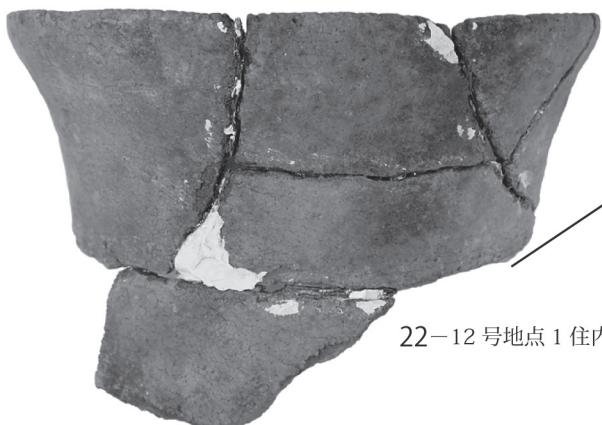
写真8 第12号地点第1号住居址出土土器(33)



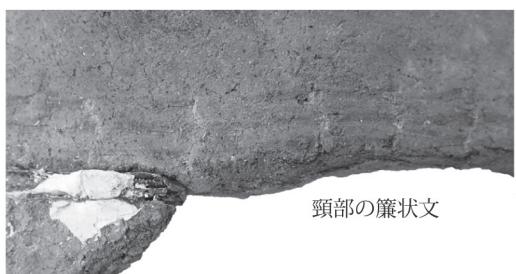
口唇部の刻目文



21-10 住 (32)

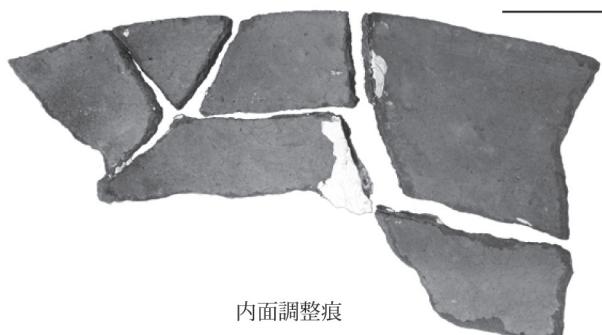


22-12 号地点 1 住内土壤 (31)

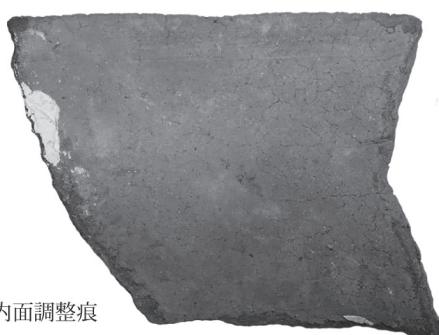


頭部の簾状文

口唇部の刻目文



内面調整痕



内面調整痕

写真 9 第 10 号住居址 (19)・第 12 号地点第 1 号住居址内土壤出土土器 (20)

(2) 朝光寺原式系土器（第8図31～33、写真8・9、第3表）

第7図24・25は、無文の朝光寺原式土器で、朝光寺原広口甕3類に当たる。赤田編年のⅢ～Ⅳ式に比定できよう。

第8図31（写真9-22）は、頸部に簾状文のみを巡らせるものである。簾状文は止めが多く、1節（1単位）の終末は工具を引き上げる施文手法であり、一般的な簾状文と様相を異にしている。赤田Ⅲ期に比定できると思われるが新しい様相を示している。

32は（写真9-21）、第10号住出土の朝光寺原式土器破片である。二次焼成を受け器面は荒れている。破片縁辺の摩耗もある。ハケ目調整後にヘラナデを施す。その後、頸部に簾状文とも思える3条の沈線文が巡る（止めが一箇所認められるが、断定するのが難しい）。この上下には櫛描波状文（朝光寺原Ⅱa類）が添えられている。櫛描文施文箇所にはハケ目調整痕を残すが、他は棒状ミガキを加えて磨り消している。口唇部には刻目文がある。また、器壁全面に化粧土が施されているが、小さな亀裂が無数に生じており、剥落箇所もある。赤田Ⅱ期に比定できよう。

33は、第12地点の第1号住出土土器である。口縁部から底部まで遺存するが、写真8で見るように欠損箇所もある。32と同様に化粧土を施しているが、二次焼成を受け剥落が著しい。胴部でほとんど剥落している箇所も見られる。頸部の位置がやや高位にあり、赤田編年のⅡ期に比定されよう。

以上のように、本遺跡出土の朝光寺原式土器は赤田編年のⅡ～Ⅲに該当する。出土住居址としては2軒のみであったが、墳丘トレーニ内からの出土があり、古墳構築時に削平されたと考えられる。いずれにしても、朝光寺原式土器を主体とする住居址は極めて少ない状況であり、赤田谷戸側（赤田遺跡群）の遺跡とは様相を異にしている。また、朝光寺原遺跡と比較すると、器形は類似性を示すが、櫛描波状文の器面展開が乏しく、様相の違いが看取できる。

(3) 土器の様相－まとめにかえて－

本遺跡は、朝光寺原式土器分布圏の中心的な位置にあると考えられていたため、近接する大場富士塚遺跡や小黒谷・赤田Ⅳ遺跡などと同様に、朝光寺原式土器が一定量を占めるのではないかと想定していたが、相反して東京湾岸系土器がほとんどを占める結果となった。距離的に見れば、同じ谷本川左岸丘陵上にある朝光寺原遺跡と1.6kmである。また、大場富士塚遺跡（坂本・宮田2024）や小黒谷・赤田Ⅳ遺跡（渡辺1998）は、早瀬川から貫入した支谷沿いの遺跡であるが、0.9～1kmの近距離にある。後者の遺跡と本遺跡とは背中合わせのような位置関係にありながら、谷が異なるだけで土器の様相は大きく異なっていることを示している。稻荷前遺跡弥生時代後期集落においては、11（12）軒の住居址が発見されたが、うち櫛描波状文・簾状文を有する土器（32）破片が出土したのは5号住居址1軒のみである。また、本集落より北東に110mほど離れた第12号地点に住居址が単独で検出され、頸部に簾状文を巡らす甕（31）が1点出土するのみである。朝光寺原式土器を主体とした住居址というにはほど遠く、本集落住居址においては、朝光寺原式土器の伴出は実質10%にも満たないというのが実態である。

第3表 稲荷前遺跡出土土器観察一覧表

土器番号	写真番号	出土遺構	器種/部位	法量(cm)	胎土/焼成/色調	器面調整	形態/文様/その他の特徴	備考
1	4-3	1号住	壺/口辺	口径：14.5 頸径：10.5 残高：5.7	微砂粒少/良好/黄褐色	内外面にはヘラナデ後に概ね縦方向の粗い棒状ミガキを施す	有段口縁/口縁に縄文(RL)、口縁外面に縦位棒状貼付文、頸部外面に赤彩/小さな剥落有り	久ヶ原Ⅲ式(新)
2	5-13	2号住	壺/口縁～肩部	口径：10.5 頸径：4.8 残高：6.2	微砂粒・白色粒多/良好/明褐色・黒灰色	内外面とも横方向のヘラナデ後に縦位の棒状ミガキ/肩部外面に輪積み痕を残す	複合口縁/口縁外面に縦位棒状沈線文/頸部屈曲部に円形竹管文を一巡させる	久ヶ原Ⅲ式(新)
3	5-16	1号住	小形広口甕 (口縁～胴部にかけて1/3を欠損)	口径：9.2 頸径：8.0 胴径：8.9 底径：5.0 器高：8.7	微砂粒少・白色粒少/良好/浅黄橙～明黄褐色	肩部に斜行縄文(RL)帯を巡らし、下端を「S」字状結節文で横帶区画/その後に棒状ミガキを施す/ミガキは縄文帯を席捲して施され、擦り消されていく箇所も多い/内面にも棒状ミガキ	口縁が短く外反/胴部も余り張らない	久ヶ原Ⅲ式(新)
4	4-1	2号住 貯蔵穴	大形壺/口頸部 (3/5を欠損)	口径：24.3 口縁幅：3.0 頸径：9.4 残高：13.6	微砂粒少・白色粒多・褐色粒極少/良好/暗赤灰色	内外面ともに棒状ミガキを施す/一部羽状縄文帯を擦り消している/内面全体と頸部外面に赤彩	有段口縁/口縁端部は受口状/口縁部には、羽状縄文+棒状貼付文+沈線文+円形赤彩文(8mm)/口縁下端に刻目文/頸部下半部に沈線文と2条の「S」字状結節文で横帶区画、以下に羽状縄文を施す/頸部屈曲部に円形浮文に竹管文を押捺/頸部外面に赤彩/所々に小さな剥落有り	久ヶ原Ⅲ式
5	4-7	5号住	鉢/口縁部破片	残高：2.5	微砂粒少/良好/黄褐色	内面に棒状ミガキを丁寧に施す。	口辺部が内傾する鉢/複合口縁/口縁部に羽状縄文/口唇部に刻目文/口縁下端に刻目文、器面と小段を有する/焼成前の小孔有り。	久ヶ原Ⅲ式
6		2号住	蓋(つまみ部)	上径：5.8 頸径：2.3 残高：3.3	微砂粒少/良好/明赤橙色	全面に細かな棒状ミガキを丁寧に施す	天面は僅かに膨らむ。	
7	4-2	8号住	大型壺/口頸部 (3/4を欠損)	口径：24.3 口縁幅：3.8 器高：7.8	微砂粒少・白色粒少量/良好/淡黄橙色・褐灰色	内外面ともに棒状ミガキで仕上げている	有段口縁/口縁端部は内屈し、やや受口状を呈する。/口縁に羽状縄文+棒状貼付文+沈線文、口縁下端に刻目文/外面の頸部と内面に赤彩/内面に細かな剥落有り	久ヶ原Ⅲ式
8	4-5	9a号住	壺/口辺部破片	残高：2.8	微砂粒少/良好/に褐灰色	ハケ目調整後に沈線文を縦位に並行施す	複合口縁で下端に小段を有する/口縁下端に小段をもつ/頸部外面には赤彩を施す	久ヶ原Ⅲ式(新)
9	4-6	9号住	壺/口縁部破片	残高：3.9	微砂粒少/良好/黄褐色	ハケ目調整→ヘラナデ→細密沈線文を縦位に並行施す/頸部には縦位ハケ目を残す	複合口縁/口縁部は内窪し、受口状を呈する/口縁には細密沈線文を縦位に並行施す/口縁下端には小段を有し、細かな刻目文を巡らせる	久ヶ原Ⅲ式(新)
10	4-10	2号住	壺/頸部 (1/4欠損)	頸径：7.8 残高：5.7	微砂粒少/良好/褐灰色。	内外面ともに縦位の棒状ミガキで仕上げている。外面は工具が強く押圧されて条線を残す箇所がある。	頸部屈曲部に扁平な円形貼付文を巡らす/頸部外面に赤彩	久ヶ原Ⅲ式(新)
11	4-11	1号住	壺/肩部破片	残高：2.9	微砂粒少/良好/淡黄褐色	羽状縄文→円形貼付文	羽状縄文が2段巡る/肩部に円形貼付文が巡り、貼付文には竹管文を加えている	久ヶ原Ⅲ式
12	5-12	3号住	壺/口頸部 (1/5欠損)	口径：20.3 残高：5.2	細砂粒多・チャート粒/良好/黄橙色	外面は縦位・斜行の棒状ミガキで仕上げている。/内面は刷毛目調整後に、ヘラナデを施している。	複合口縁/口頸部はラッパ状に大きく開き、口唇部は外に向く/棒状貼付文(7単位)と浅い沈線を縦位に並行施す/口縁下端は器面と段を有する/頸部は無文/口縁内面に縄文施文の痕跡が有るが摩耗で不明	久ヶ原Ⅲ式(新)～(日吉台式)
13	5-15	5号住	壺/口辺部破片	残高：3.4	細砂粒多量/良好/灰茶褐色	口縁部にユビナデ/頸部及び内面はハケ目調整	複合口縁/無文/頸部に赤彩	久ヶ原Ⅲ式(新)
14	4-4	9号住	壺/口縁部破片	残高：2.8	微砂粒多/良好/褐灰色	口縁部と内面にユビナデ/頸部に縦位ハケ目を残す。	複合口縁/棒状貼付文が剥落/頸部には赤彩	久ヶ原Ⅲ式(新)
15	4-8	5号住	壺/肩部破片	残高：3.42	微砂粒多/良好/暗茶褐色	胴上半無文部にミガキ。	胴部上位に平行する2条の鋸歯状沈線文で横帶区画し縄文(RL)を充填/その上下無文部には赤彩を施す	久ヶ原Ⅲ式(新)
16		3号住	甕/口縁部破片	残高：3.6	微砂粒少・チャート粒や多/良好/灰茶褐色	縄文施文後にヘラナデ/ヘラナデは縄文を擦り消している/内面は横方向のヘラナデを施すが、輪積み痕を残す箇所もある。	口縁上端は内削ぎがあり銳角を呈する/外面には斜行縄文(LR)を施す	吉ヶ谷式

土器番号	写真番号	出土遺構	器種/部位	法量 (cm)	胎土/焼成/色調	器面調整	形態/文様/その他の特徴	備考
17	4-9	3号住	壺/胴部破片	器高： 2.6	微砂粒少/良好/茶褐色	縄文施文後に無文部には横向の棒状ミガキを施す。	羽状縄文帯の下端に2条の「S」字状結節文で横帶区画/無文部に赤彩か	久ヶ原Ⅲ式
18		8号住	台付甕/脚部(1/2欠損)	脚頸径：5.3 脚底径：8.0 残 高：7.8	細砂粒多/良好/褐色	内外面ともにヘラナデ後に、棒状ミガキで仕上げている。ミガキは粗く光沢はない。	脚高が低く脚の開きが弱い/器肉は比較的の薄く仕上げられている	
19	5-14	4号住	壺/口辺部(3/5欠損)	口径：17.1 残高：6.0	微砂粒少・白色微粒極多/良好/明橙色	内外面ともに棒状ミガキを施す。ミガキが強く條線状を呈する箇所が多い。	有段口縁/口縁部はやや内屈し、受口状になる/内外面ともに赤彩を施す無文	久ヶ原Ⅲ式(新)
20		3号住	高杯/脚部(5/6欠損)	脚頸径：3.4 脚底径：11.4 残 高：8.0	微砂粒少/良好/外面は暗茶褐色、内面は浅黄橙色・黒褐色	内外面ともに丁寧な棒状ミガキを施す/内面にはハケ目調整痕が所々残る/内面頂部付近にはユビナデによる稜線を止めれる。	外面に赤彩を施す	日吉台式
21		3号住	甕/底部(1/2欠損)	底径：6.0 残高：5.8	微砂粒少・白色微粒少/良好/明褐色	内外面ともにヘラナデ後に粗い棒状ミガキを施す。	無文	
22	6-17	2号住	壺形甕/口縁・胴部・底部に欠損有り	口径：14.6 頸径：13.5 胴径：20.5 残高：19.5	微砂粒やや多・白色粒多/良好/黄褐色・淡橙色	ハケ目調整後にヘラナデを施し、底部には棒状ミガキを加える。	口径は胴部径の約7割と小さい/口縁は短く外反する/胴部は丸味をもつ/口唇部にはヘラによる刻目文を施す/無文/二次焼成/胴部下半に煤付着	
23	6-18	10号住	壺形甕/口縁～胴部の1/5を残存する	口径：16.7 頸径：15.3 胴径：20.5 残高：13.2	細砂粒・白色粒少/良好/淡黄色/橙色	内外面ともにヘラナデを施し、外面には棒状ミガキを加えている。内面には輪積痕を止める箇所がある。	口径は胴部径の約8割と22より口径の比率が大きい/口辺は外反するが垂直的である/口唇部には交互押圧文が見られる/無文/二次焼成	
24		8号住	甕/口縁～胴部の1/6を残存する	口径：14.9 頸径：13.3 胴径：15.3 残高：9.7	微砂粒・長石粒・褐色粒少/良好/鈍い橙色	ハケ目調整後にヘラナデ→ミガキを施す。	頸部の窄まりが小さい/口縁は短く、外反する/口唇部には刻目文を施す/無文	朝光寺原式赤田Ⅳ期
25		6号墳西トレンチ	甕/口縁～胴部の4/6を残存する	口径：18.2 頸径：14.9 胴径：17.3 残高：13.6	微砂粒少・白色粒極少/良好/暗褐色～暗茶褐色	ハケ目調整→ヘラナデ→棒状ミガキを施す。	頸部の窄まり方がやや小さく、胴部の張りが弱い/口縁は短く外反する/口唇部には刻目文を施す/無文/二次焼成	朝光寺原式赤田Ⅲ期新
26	7-19	1号墳西トレンチ	広口甕/ほぼ完形(口縁部を1/4欠損)	口径：16.2 頸径：12.9 胴径：13.2 底径：5.7 残高：5.8	細砂粒少/良好/橙色	ヘラ調整後に、肩部に斜行縄文(LR)を施し、さらに棒状ミガキで仕上げる/胴部下半部に、指で撫でつけたような赤彩箇所がある。	胴部中位から頸部にかけての窄まりが弱く垂直的に立ち上がる/口縁は外反する/口唇部は外向きとなり縄文を施す/口縁内面にも縄文を施す/仕上げのミガキは縄文を擦り消している/頸部届曲部に2孔1対の焼成前小孔がある	久ヶ原Ⅲ式(新)
27		1号墳3・9トレンチ	大型壺/口辺部破片	口径：24.1 残高：8.5	微砂粒・白色粒少/良好/黄橙色	内外面ともにヘラナデを施し、棒状ミガキで仕上げである/外面はヘラナデ後に斜行縄文(LR)を施すが、大部分がミガキによって磨り消されている。	複合口縁/口縁下端は器面と小段を成す/窄まった頸部から開きながら立ち上がり、内湾し垂直的な口縁に至る/無文	久ヶ原Ⅲ式(新)～(日吉台式)
28		3号住	甕/口縁部破片	残高：4.9	微砂粒・白色粒少/良好/外面は黒灰色・内面は暗褐色	外面には横方向のヘラナデがあり、縦方向のハケ目調整痕を消している/内面にも横方向のヘラナデがある。	口縁は弱く外反する/口唇部には棒状工具による連続押圧文がある/内面の口唇下には細沈線が巡る無文	
29		5号住	甕/口縁部破片	残高：2.9	微砂粒・白色粒少/良好/外面は黒灰色・内面は明褐色	外面には横方向のヘラナデがあり、縦方向のハケ目調整痕を消している/内面にも横方向のヘラナデがある。	口縁部は外反し口唇は外向きとなる/無文で縦方向のハケ目調整を止める/口唇部には棒状工具による連続押圧文がある/二次焼成	
30		5号住	甕/口縁部破片	残高：2.8	微砂粒・白色粒少/良好/外面は黒灰色・内面は黄灰色	外面には縦方向の木端状工具によるハケ目調整を残す/内面は横方向の刷毛目調整で仕上げている。	口縁部は弱く外反する/口唇部には交互押圧文が見られる	
31	10-22	12号地点 1号住	甕/口頸部(胴部～底部を欠損)	底径：6.0 残高：5.8	微砂粒少・白色粒多/やや不良/外面は灰白色・地は褐色	内外面共に木端調整→ヘラナデ→ミガキの順で器面調整を行っている。	頸部の窄まり方はやや弱い/口縁端部は先細り、口唇部に刻目文を施す/頸部に簾状文のみを巡らせる/化粧土にヒビ割れと剥落が顕著/二次焼成	朝光寺原式赤田Ⅲ期
32	10-21	10号住	甕/口辺部破片	口径：19.1 頸径：16.1 残高：11.4	微砂粒少/悪い/外面は明茶褐色・赤灰色	内外面共にヘラナデ後に棒状ミガキを施す	口縁下に簾状文を巡らせ、その上下に櫛描波状文を加飾する/化粧土のヒビ割れと剥落がある/二次焼成	朝光寺原式赤田Ⅱ期新
33	8-20	12号地点 1号住 床面	甕/ほぼ完形(所々に一部欠損箇所有り)	口径：16.0 頸径：14.3 胴径：17.9 底径：5.9 器高：24.5	微砂粒少・白色粒極少・長石粒やや多/悪い/外面は黄色灰色、地は黒灰色・褐色	内外面ともに、木端調整→ヘラナデ→ミガキの順で器面調整を行う	頸部の窄まりと胴部の膨らみがやや弱い/口径は胴部最大径の89%を示す/化粧土のヒビ割れが顕著で剥落箇所も多い/二次焼成	朝光寺原式赤田Ⅱ期

(4) 土製品・石製品・青銅製品（第3・9図34～46）

澤田大多郎氏が実測図（原図）を作成した遺物13点を掲載した。弥生集落址に伴うと考えられるものを中心としたが、澤田氏の成果を記録にとどめるため、他時期のものも含めた。記録のある各遺物の出土位置（稻荷前古墳群調査委員会1969、小林1969）は、第3図に記した。43・44以外は所在が不明であり、横浜市歴史博物館に現存していない。その他に、集落址出土遺物として「蛇紋岩製勾玉・ガラス小玉」があるとされているが（小川1978）、澤田氏の実測図にも存在していないかったため割愛せざるを得なかつた。

土製品の中では土製勾玉（5点）が最も多い。小型の34～36と大型の37・38がある。36は形態的に大型品に近い。35は「く」の字状、他は丸みをもち「C」字状を呈する。土製勾玉は、本遺跡東方の小黒谷・赤田No.17遺跡においても多数検出されている（上野1973、渡辺1998）。同遺跡では「く」の字形のものが主体であり、半欠品も多い。丸みのある「C」字状を呈する本遺跡例は、類例が少ないといえる。

小孔が縁辺に偏して穿たれた土製円盤39の用途は不明であるが、5号住居址内出土であり、弥生後期といえよう。

土製紡錘車41は、小黒谷・赤田

No.17遺跡にも類例があり、弥生後期の住居址（2号住）に伴うものとみてよいであろう。

鐸形土製品40は、粘土板を鐘形に成形し、ユビナデによって丁寧に作られている。平面形は橢円形を呈し、長径方向の上部に貫通孔を有する。上部の窄まり方や橢円形・孔の存在など、銅鐸を忠実に模している。近隣遺跡に類例はないが、埼玉県和光市牛王山遺跡の弥生後期集落址から3点出土し、うち1点の頂部には孔が穿たれている（和光市教育委員会2019、2023）。土製であるが、“まつり”（祭祀）を示す重要な資

第4表 土製品・石製品・青銅製品

<土製勾玉>

遺物No.	出土位置	大きさ(cm)	色調
34	2号住床面	長3.5・断面1.3×1.3・孔径0.2	赤褐色
35	8号住床面	長3.7・断面1.2×1.2・孔径0.3	
36	C1号横穴墓 前部	長3.9・断面1.8×1.7・孔径0.3	赤褐色 灰褐色
37	不明	長5.7・断面2.7×2.1・孔径0.6	
38	1号墳東側周溝 (7号住)	長6.2・断面2.6×2.4・孔径0.6	

<有孔土製円盤>

遺物No.	出土位置	大きさ(cm)	色調
39	5号住居址	長4.0・厚さ1.1・断面・孔径0.2～0.55	褐色

<鐸形土製品>

遺物No.	出土位置	大きさ(cm)	色調
40	2号住居址 (1号墳封土)	高4.6・上径1.1～2.1・底径3.5～4.2	

<土製紡錘車>

遺物No.	出土位置	大きさ(cm)	色調
41	不明	径4.5×4.5・厚さ1.0～1.7・孔径0.6	

<石製紡錘車>

遺物No.	出土位置	大きさ(cm)	色調
42	不明	径4.25×4.5・厚さ0.9～1.2・孔径0.9	茶褐色

<玦状耳飾り>

遺物No.	出土位置	大きさ(cm)	色調
43	3号住居址覆土	残長3.5・厚さ0.4～0.7	軟玉

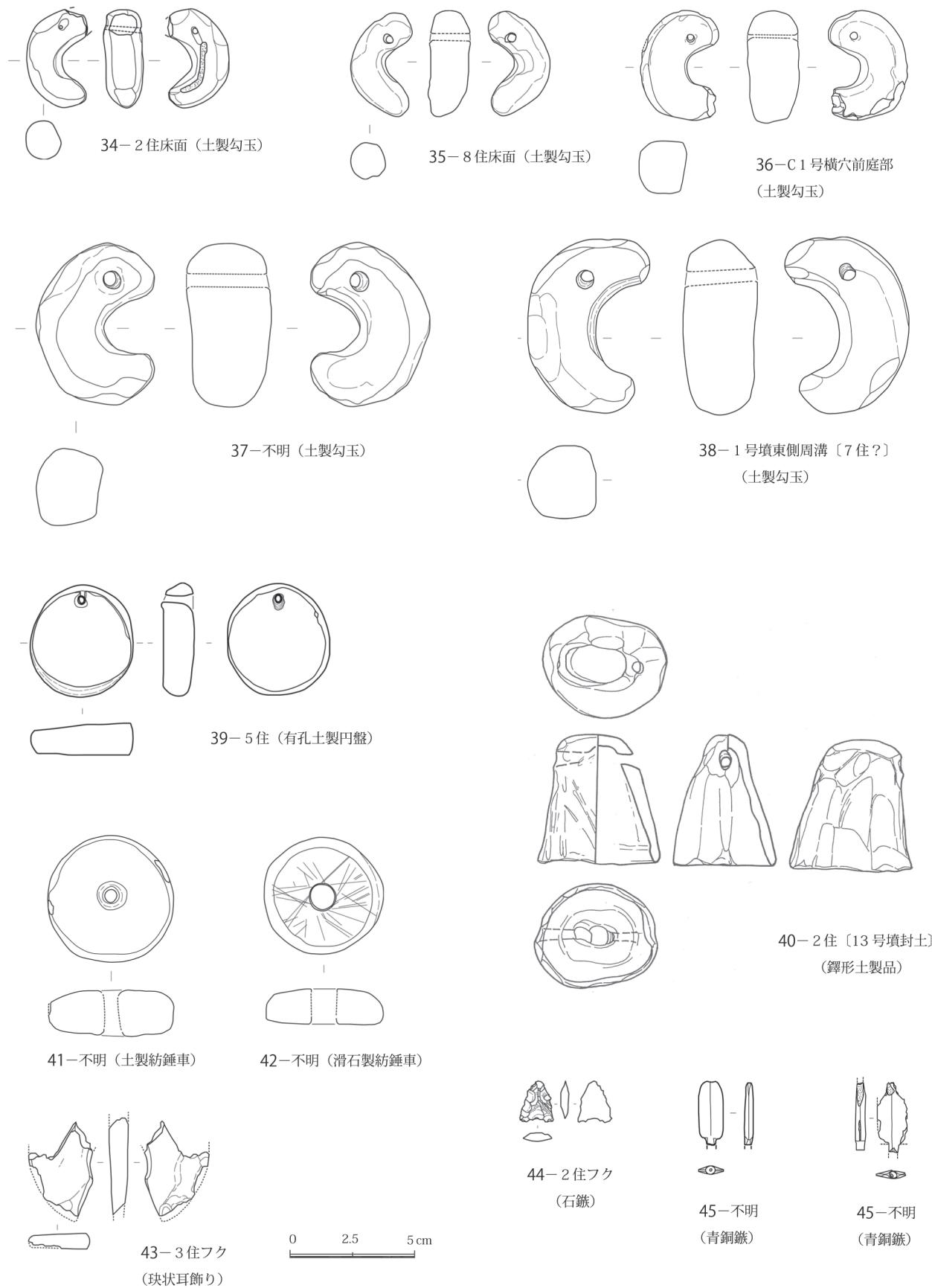
<石鎌>

遺物No.	出土位置	大きさ(cm)	色調
44	2号住居址覆土	長1.4・幅1.2・厚さ0.25	黒曜石

<青銅製鎌>

遺物No.	出土位置	大きさ(cm)	色調
45	不明	長2.3・幅0.9・厚さ0.3	
46	不明	長2.3・幅1.0・厚さ0.3	

（※出土位置・大きさ・色調は、澤田大多郎氏の実測図原図による）



第9図 稲荷前遺跡出土 土製品・石製品・青銅製品（澤田大多郎氏の実測原図による）

料である。関東地方でも類例が少ない。13号墳盛土（封土）中の出土だが、本来直下の2号住居址に属するものであり、古墳造成時に盛土中に混入したものと判断した。

青銅製鏃45・46は出土位置不明だが、同時期の赤田No.6遺跡に類例があり（渡辺1994）、本集落址においても伴うものと想定できる。

2・3号住居址から出土した玦状耳飾43と石鏃44は、出土遺物中に諸磯式土器が存在することから、これらに伴うものではないかと考えられる。1・13号墳周辺に縄文時代の包含層が存在することを示している。

滑石製紡錘車42は、古墳時代中期に一般的で、1号墳との関わりが考えられる。

以上の土製品・青銅製品は、本弥生集落の特質を示す遺物であり、これらの欠失がなんとしても惜しまれる。

4. 稲荷前弥生集落の意義

第5表 稲荷前集落址の遺構と遺物

稻荷前古墳群内に存在した弥生集落址の遺構と遺物のあり方は、右のように整理できる。

集落では住居址12軒のうち8軒に遺物があり、1号墳周溝部にも存在した可能性はあるが、集落の大要はうかがえる。6号墳にも住居址の存在が考えられ、地形から12地点と類似することが想定される。以上のことから、稻荷前古墳群内には、中型の集落1カ所と単独住居2カ所が存在したと考えられる。

遺物は、土器の他に土製品・青銅製品が加わり、本地域の弥生後期集落（赤田遺跡群など）と共通した様相である。集落址出土土器の大半は久ヶ原Ⅲ式で、日吉台式が少数ある。朝光寺原式は1割弱で、吉ヶ谷式をごくわずかに含む。したがって、本集落は東京湾岸系集落といえよう。これに対して、12地点は朝光寺原式が主体で、6号墳地点も同様とみられる。小支谷を隔てただけで、対照的な二系統の集落が分布しているわけである。

朝光寺原式土器の分布は、およそ北が上神明遺跡（世田谷区遺跡調査会1984）、西が鶴川L地点（大場編1972）、南が三殿台遺跡（坂本・宮田2022）、東が南加瀬貝塚（MUNRO 1908）・大熊宮原遺跡（坂本・宮田2021）の範囲である。東西約15km・南北約25kmの広さで、多摩丘陵東部を中心に、下末吉台地・武藏野台地にも及んでいる。

わけても、朝光寺原遺跡のある谷本川から早淵川上流域、川崎市北部の多摩川南岸（右岸）地域に集中しており、稻荷前遺跡もその一角に位置している。この地域には、また比企丘陵の吉ヶ谷式土器が伴出する（浜田・宮川2003）。

朝光寺原式期の集落が、必ずしも朝光寺原式土器を主体としていることは、早くから高速2号線No.6遺跡で指摘されていた。そこでは土器の器種と遺構をもとに、「在地系集団」と「朝光寺原式集団」とが、一集落内で「共住していた」と考えられた（松本1984）。釧廻堂遺跡では、弥生町式が9割を占めていたた

遺構	遺物	遺構	遺物
1住	1・3・7・11	9住	8・9・14
2住	2・4・6・16・20・ 21・22・34・40・44	10住	23・32
3住	12・17・28・43	1号墳	26・27・38
4住	19	6号墳	25
5住	5・13・15・29・30・ 39	12地点 1住	31・33
8住	18・24・35	C1横穴墓 前庭部	36

め、「朝光寺原式を含む小文化圏の」「実体については不明」としている（渡辺 1989）。また朝光寺原式は「考えるほど不思議な在り方の土器であることが緒在化するだけで、集団像が一向に見えてこない」と（浜田 2000）、困難な研究対象であることを述べている。

このように、複雑な様相を示す朝光寺原期の集落をさぐる一つの手がかりとして、報告された3系統の土器（朝光寺原式・東京湾岸系・吉ヶ谷式）の遺跡における割合を整理してみた。このうち、大場富士塚は主要な土器を選んでおり（坂本・宮田 2024）、正式報告時には数値変動の可能性がある。四枚畠遺跡は朝光寺原期で唯一の環濠集落とされ（小宮・山田 2003）、土器は全部で 692 点あり、判別数はその 76% となる。

第 6 表 朝光寺原式出土遺跡における土器の割合

[※数字は報文実測図・拓本点数、() 内は%、小数点以下は 1 とした。]

遺跡名（遺構数）	判別数	朝光寺原式	東京湾岸系	吉ヶ谷式	出典
稻荷前（住12・方1）	30	5 (17)	24 (80)	1 (3)	本稿
大場富士塚（住17・壺棺1）	105	70 (67)	35 (33)	0	坂本・宮田 2024
赤田No.1（住5）	42	33 (79)	9 (21)	0	渡辺 1994
赤田No.6（住18）	111	36 (32)	74 (66)	2 (2)	同上
赤田No.10（住5）	78	71 (90)	7 (10)	0	同上
赤田No.15（住7）	50	26 (52)	21 (42)	3 (6)	渡辺 1998
釈迦堂（住10・方2）	197	21 (11)	169 (87)	4 (2)	渡辺 1989・2003
閑耕地（住49）	570	248 (44)	306 (53)	16 (3)	田村・戸田・麻生 1997
四枚畠（住13・溝2）	526	244 (46)	281 (53)	1 (1)	小宮・山田 2003
東泉寺上（住17）	77	41 (53)	26 (34)	10 (13)	持田・村田 1988・2007、横山・杉本 2009
伊屋之免遺跡2（住6・方3）	73	28 (38)	36 (50)	9 (12)	渡辺 2008

稻荷前遺跡から閑耕地遺跡までは、僅か 3km の狭い地域ながら、朝光寺原式土器主体（大場富士塚・赤田 No. 1・赤田 No. 10 遺跡）、東京湾岸系土器主体（稻荷前・赤田 No. 6・釈迦堂遺跡）、両者混交（赤田 No. 15・閑耕地遺跡）に分けられる。この地域では 3 つのタイプが混在しており、朝光寺原式分布圏の中心的位置にありながら、東京湾岸系の集落は孤立した存在ではない。しかも、地域最大級の閑耕地は東京湾岸系土器がやや優位を占めており、朝光寺原期の集落とはいがたい。少し離れた四枚畠遺跡も、朝光寺原式と東京湾岸系の割合が閑耕地遺跡と類似した様相を示しており、朝光寺原期の集落とは何かという基本を考えさせる。多摩川下流域右岸の東泉寺上遺跡では、吉ヶ谷式がやや多く含まれるもの、朝光寺原式が約半数を占める。これに対して伊屋之免遺跡第 2 地点は、朝光寺原式と東京湾岸系の差が少ない。

朝光寺原期の集落で注目されるのは、分布圏のかなり西部に位置する受地だい山遺跡である（奈良地区遺跡調査団 1986）。住居址 28 軒が広い斜面の周辺部に 5 カ所に分かれて立地し、やや中央の空白部に方形周溝墓 2 基が構築されている。こうした集落形態は、本地域の他の遺跡と異なっている。斜面下部の埋積谷から多量の朝光寺原式土器が出土し、集落における本来の土器のあり方を想起させるものであった。

朝光寺原式の主要器種は平底甕であり、壺・鉢・台付甕は少ない。それらは東京湾岸系が担い、両者合わせて一つのセットをなすのが基本構造である。朝光寺原式の中に東京湾岸系が組成するのではなく、東京湾岸系の中に朝光寺原式が組成するといえよう。

朝光寺原遺跡の弥生後期集落は住居址 60 軒、方形周溝墓 6 基で、東京湾岸系（久ヶ原・弥生町・前野町式）が主体である（岡本 1968）。先に、住居址のうち 14 軒に朝光寺原式が存在することを紹介したが（坂本・宮田 2022）、これは同遺跡のすべての弥生後期土器の調査結果ではない。B 区 510 号住では朝光寺原式が 9 割、東京湾岸系は 1 割で、この資料が、朝光寺原遺跡における朝光寺原式土器の大半を占めている。このように、1 住居址内で朝光寺原式が圧倒的多数を占める例として、寺中ノ原遺跡 1 号住があげられる。これも B 区 510 号住と同じく火災住居址である（坂本・久世 2000）。

朝光寺原式の簾状文・櫛描波状文はこの地域で判別しやすい文様で、それだけに強い印象を受ける。無文土器の胎土は硬質で薄く、厚手で茶褐色の東京湾岸系土器とは異なっている。こうした点からも、集落内における朝光寺原式の存在が大きく見え、それが朝光寺原期の集落へとつながってしまうのであろう。

朝光寺原式研究の初期に示された朝光寺原式の分布圏は、「横浜・川崎の丘陵地帯」で、「下末吉台地一帯の久ヶ原・弥生町式」と明確に区別されている（武井 1986）。これは朝光寺原式を固有の分布圏をもつ領域としているが、今日から見れば首肯しがたい。久ヶ原・弥生町式の西限線の外側にある朝光寺原遺跡は、上記のように東京湾岸系の集落として報告されていたからである。

古屋紀之は、久ヶ原・弥生町問題を解決するために、東京湾西岸においては「南武藏南部様式（久ヶ原・大原式）」を提唱した（古屋 2018）。その西限線は、川崎では長尾台北遺跡、横浜では関耕地遺跡におかれ、朝光寺原遺跡には及んでいない。前述の受地だい山遺跡にも少数ながら東京湾岸系は伴出しており、近年報告された調布市染地遺跡でも、朝光寺原式に共伴して久ヶ原式が出土している（及川 2023）、南武藏南部様式の分布はさらに広がるとみなければならぬ。

このように、朝光寺原式の分布圏は独立したものではなく、東京湾岸系あるいは南武藏南部様式の西半分と重複することが明らかである。このことは、朝光寺原式が常に東京湾岸系と共存することに矛盾していない。稻荷前弥生集落址は、朝光寺原式分布圏における弥生後期集落のあり方について示唆を与える重要な意義を有している遺跡といえよう。

おわりに

朝光寺原遺跡は、1967・68 年に発掘調査され、69 年に「朝光寺原式」が提唱された。しかし、報告書は刊行されず、型式内容は不充分のままであった。一方、70 年代に入ると、多摩丘陵の開発は爆発的に進行し、事前調査によって朝光寺原式の資料は右肩上がりに増大した。先鋭的な研究者が編年や集団、生産基盤などの研究に取り組み、今日に見る朝光寺原式像が形成されてきた。こうした研究の進展にもかかわらず、基礎資料の公開は一向に進まず、いわば片肺飛行の側面が否めなかった。

筆者らは樽式との分離を明示する大熊宮原遺跡の台付甕再発見を契機として、型式成立の根幹となった資料の再検討を行った（坂本・宮田 2021）。最大の鍵である朝光寺原遺跡 B 区 510 号住出土土器の全容を提示すると共に、櫛描波状文が主体であることを改めて確認し、同遺跡の朝光寺原式も摘出した。併せて、分布圏の南端に位置する三殿台遺跡にも、相当量の朝光寺原式が存在することを紹介した（坂本・宮田 2022a）。

朝光寺原式の元型をなす「荏田式」土器を精査し、ヤカマス台例は資料を確認できなかったが、小黒谷例は「長者原遺跡」と判明した（坂本・宮田 2022b）。日本窯業史研究所のご高配により、大場富士塚遺跡の主要資料を提示し、「大場富士塚タイプ」の存在を提唱した（坂本・宮田 2024）。

当初、朝光寺原系と想定した稻荷前集落址は、明確に東京湾岸系の集落であった。釧迦堂・赤田 No. 6 遺

跡も同様であり、この地域では東京湾岸系・朝光寺原系2系統の集落が踵を接していることになる。こうした状況を基礎として、朝光寺原式分布圏の集落を考えてゆく必要がある。

朝光寺原式は住居内においても、集落内においても、東京湾岸系あるいは南武藏南部様式と合わせて一体となっている。決して独立・対立的な存在ではなく、後者の分布圏西部に朝光寺原式が浸透してきたのである。したがって、朝光寺原式の解明にあたっては、東京湾岸系と南武藏南部様式のあり方が鍵を握っていると私考する。

筆者らのささやかな取り組みが、朝光寺原式の“ミッシング・リンク”を少しでも埋め、さらなる研究進展への一里塚となれば幸いである。
(2024年12月31日稿了)

【謝辞】

資料の熟覧及び写真撮影・実測にあたり、横浜市歴史博物館、新潟市文化財センター、新潟大学旭町学術資料館のご高配をいただき、橋口 豊・相澤裕子・今井さやか・清水美和・小林紀子各氏にはお世話になった。稻荷前遺跡関係資料（甘粕 健資料）の探索にあたっては、甘粕靜枝・川上真紀子・斎藤瑞穂・橋本博文各氏を煩わせた。また、田中義昭氏からは集落址遺構全測図（青焼き）、澤田大多郎氏からは遺物実測図を提供していただいた。小宮恒雄・川井正一・曾根博明・松村昌彦・古屋紀之・渡辺貞幸・渡辺 努各氏から貴重なご教示を賜り参考とさせていただいた。明記して謝意を表する次第である。

【追記】

2024年8月、長野県埋蔵文化財センターにおいて、『日本先史土器図譜』第V輯（山内 1940）に掲載された2点の弥生土器が再発見された。いずれも川崎市高津区下作延遺跡の出土品で、発掘者 藤沢宗平氏が信州大学医学部へ寄贈したと思われる。No.46の壺は吉ヶ谷式で、No.48-1の小型甕は最初期に報告された朝光寺原式である。先般、『長野県埋蔵文化財センター年報 41 2024年度』に報告した（坂本・宮田 2025）ので、併読していただければ幸いである。

【参考・引用文献】

- 甘粕 健・川井正一・大脇 潔・佐藤善一・田中義昭・岡田清子・松村昌彦・古山 学 1968 「稻荷前古墳群の発掘調査」『昭和42年度横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書（経過概報）』横浜市域北部埋蔵文化財調査委員会
- 甘粕 健 1969 「13号墳」「いなりまえ」4 稲荷前古墳群調査団
- 甘粕 健・山口隆夫 1982 「横浜市緑区稻荷前16号墳の調査」『第6回神奈川県遺跡調査会・研究発表会発表要旨』
- 安藤広道 2017 「寄稿論文 久ヶ原式遺跡と久ヶ原式土器」『平成28年度特別展 土器から見た大田区の弥生時代－久ヶ原遺跡発見、90年－』大田区立郷土博物館
- 安藤広道 2019 「第4章分析・考察 1.日吉台遺跡群の弥生土器について」『日吉台遺跡群発掘調査報告書 2006年度～2014年度の調査成果』慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室

- 伊丹 徹・池田 治 2000「神奈川県における弥生後期土器編年」『東日本弥生後期の土器編年〔第1分冊〕』
東日本埋蔵文化財研究会・福島県立博物館
- 稻荷前古墳群調査委員会 1969『横浜市港北区大場町稻荷前古墳群の調査の成果』
- 上野佳也・池上 悟 1973『小黒谷遺跡発掘調査概報』中央大学考古学研究会
- 及川良彦 2023『染地遺跡第128地点』東京都埋蔵文化財センター調査報告第374集（公財）東京都ス
ポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター
- 大場磐雄編 1972『鶴川遺跡群』雄山閣
- 岡本 勇 1968「朝光寺原A地区遺跡第一次発掘調査略報」『昭和42年度横浜市域北部埋蔵文化財発掘調
査報告』横浜市域北部埋蔵文化財発掘調査委員会
- 岡本 勇・武井則道 1969「朝光寺原式土器について」『昭和43年度横浜市埋蔵文化財調査報告書』横浜市
埋蔵文化財調査委員会
- 小川裕久 1978「県史跡稻荷前古墳群」『神奈川県文化財図鑑』神奈川県教育委員会編・刊
- 柿沼幹夫 2009「北武藏中央部の後期土器」『南関東の弥生土器2～後期土器を考える～』考古学リーダー
16 六一書房
- 小林 茂 1969「土製勾玉が出土する」『いなりまえ』2 稲荷前古墳群調査団
- 小宮恒雄・山田光洋 2003『四枚畳遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告32（財）横浜市ふ
るさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 坂本 彰 1986「稻荷前遺跡」『緑区史 資料編2』緑区史刊行委員会
- 坂本 彰・久世辰男 2000「横浜市寺中ノ原遺跡の朝光寺原式土器」『横浜市歴史博物館紀要』第4号 横
浜市歴史博物館
- 坂本 彰・宮田 毅 2021「幻の朝光寺原式土器基準資料－櫛描波状文のある弥生台付甕－」『利根川』43
利根川同人
- 坂本 彰・宮田 毅 2022a「朝光寺原式土器の根源的研究－朝光寺原・三殿台遺跡を中心に－」『横浜市歴
史博物館紀要』第26号（電子版）横浜市歴史博物館
- 坂本 彰・宮田 毅 2022b「「荏田式」土器の再検討」『利根川』44 利根川同人
- 坂本 彰・宮田 毅 2024「続・朝光寺原式土器の根源的研究－大場富士塚遺跡の弥生土器をめぐって－」
『横浜市歴史博物館紀要』第28号（電子版）横浜市歴史博物館
- 坂本 彰・宮田 毅 2025「川崎市高津区下作延遺跡出土の弥生土器について－『日本先史土器図譜』第V
輯46・48-1の再発見－」『長野県埋蔵文化財センター年報41 2024年度』（一財）長野県文化振興事業
団長野県埋蔵文化財センター
- 世田谷区遺跡調査会編 1984『上神明遺跡I』世田谷区教育委員会
- 武井則道 1986「朝光寺原式土器とその分布圏」『古代のよこはま』横浜市教育委員会
- 田中義昭 1996「弥生時代拠点集落の再検討」『考古学と遺跡の保護 甘糟 健先生退官記念論集』甘粕
健先生退官記念論集刊行会
- 田村良照・戸田哲也・麻生順司 1997『横浜市観福寺北遺跡群閑耕地遺跡発掘調査報告書』観福寺北遺跡發
掘調査団
- 奈良地区遺跡調査団編・刊 1986『奈良地区遺跡群I（上巻）』No.11 地点受地だい山遺跡
- 浜田晋介 2000「朝光寺原式土器・その存在の背景－弥生時代・異系統土器の分布－」『竹石健二先生・澤

田大多郎先生還暦記念論文集』 竹石健二先生・澤田大多郎先生の還暦を祝う会
浜田晋介・宮川和也 2003「吉ヶ谷式土器の拡散と変容」『埼玉考古』第38号 埼玉考古学研究会

浜田晋介 2009「朝光寺原式土器の編年と共に伴土器」『南関東の弥生土器2～後期土器を考える～』考古学リーダー16 六一書房

浜田晋介 2015「コメント 朝光寺原式土器からみる集団構成論メモ」『考古学リーダー24 列島東部における弥生後期の変革～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』六一書房

古屋紀之 2014「南武蔵地域における弥生時代後期の小地域圏とその動態」『久ヶ原式・弥生町期の現在－相模湾／東京湾の弥生後期の様相－』西相模考古学研究会

古屋紀之 2017「寄稿論文 人間集団を映す甕－弥生時代後期の甕から見た南武蔵南部の部族－」『平成28年度特別展 土器から見た大田区の弥生時代－久ヶ原遺跡発見、90年－』大田区立郷土博物館

古屋紀之 2018「久ヶ原式・弥生町式問題再論」『西相模考古』第27号 西相模考古学研究会

古屋紀之 2023「第4章 第2節 弥生時代後期土器の編年的位置づけと集落の様相」『舞岡熊之堂遺跡－舞岡新墓園事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－（第2分冊）』（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

古屋紀之・上山敦史 2024「横浜市青葉区稻荷前16号墳出土の年代とその評価」『横浜市歴史博物館紀要』第28号 横浜市歴史博物館

増子章二編 1982『新作小高台遺跡発掘調査報告書』川崎市教育委員会

松本 完 1981「第7章第3節 本遺跡出土久ヶ原式・弥生町期の土器について」『横浜市道2号線埋蔵文化財発掘調査報告書1980年度（No.6遺跡－I）』横浜市道2号線埋蔵文化財発掘調査団

松本 完 1984「弥生時代～古墳時代初頭の遺構と遺物について」『横浜市道2号線埋蔵文化財発掘調査報告書1983年度（No.6遺跡－IV）』横浜市道2号線埋蔵文化財発掘調査団

持田春吉・村田文夫 1988『東泉寺上遺跡』高津図書館友の会郷土史研究部

持田春吉・村田文夫 2007『東泉寺上遺跡D地点』東泉寺上遺跡D地点発掘調査団

横浜市教育委員会 1979『神奈川県指定史跡稻荷前古墳群保存整備計画策定報告書（基本計画）』横浜市教育委員会編・刊

横山太郎・杉本靖子 2009『東泉寺上遺跡E地点』吾妻考古学研究所

和光市教育委員会 2019『埼玉県和光市牛王山遺跡総括報告書』和光市埋蔵文化財調査報告書第66集 和光市教育委員会

和光市教育委員会 2023『国史跡指定記念 牛王山遺跡展－独立丘に営まれた弥生時代の環濠集落－』和光市教育委員会編・刊

渡辺 努 1989『积迦堂遺跡』日本窯業史研究所

渡辺 努 1994『横浜市緑区赤田遺跡群 集落編I－No.1遺跡、No.2遺跡、No.6遺跡、No.10遺跡－』日本窯業史研究所

渡辺 努 1995「朝光寺原様式の基礎的研究」『王朝の考古学』雄山閣

渡辺 努 1997「付編 長尾台北遺跡出土の朝光寺原式土器について－14号住居址出土遺物が提起する朝光寺原式出現期の問題をめぐって－」『川崎市多摩区長尾台北遺跡発掘調査報告書』長尾台北遺跡発掘調査団

渡辺 努 1998『横浜市緑区赤田遺跡群 集落編II－No.12遺跡、No.14遺跡、No.15遺跡、No.17遺跡－』日

本窯業史研究所

渡辺 努 2001 「その頃南武藏の片隅で」『弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』西相模考古学研究会

渡辺 努 2003 『釈迦堂遺跡第2地区』日本窯業史研究所

渡辺 努 2008 『伊屋之免遺跡第2地点』日本窯業史研究所

N·G·MUNRO 1908 『PREHISTORIC JAPAN』(自費出版)

附一朝光寺原遺跡C地区南西部全景



朝光寺原遺跡第2次調査（1968年）の航空写真である。同調査の航空写真全景は、調査概報に掲載されているが、本カットは、その南側（C地区南西部）を中心としている。手前には、第1次調査の230号・240号住居址などが並び、その上のやや明るい部分が1号墳の除去部分。左端中位の小屋の右に環濠とその断面が見える。左上は建設中の東名高速道路である。（中村嘉男ほか 1969「朝光寺原遺跡C地区調査概報」『43年度横浜市埋蔵文化財調査団報告書』横浜市埋蔵文化財調査委員会を参照）

写真10 朝光寺原遺跡C地区南西部全景（新潟市文化財センター所蔵 甘粕 健資料）